

感覚統合の視点を持った保育

福島県（研究会員）・ユーパロ室ノ木保育園 ユーパロつつみ分園 伊丹 陽

1. はじめに

昨年度、私は「子どものこころとことばの育ち」という研修に参加した。この時、初めて「感覚統合」という言葉を知った。この研修で、感覚統合とは「脳の中の電線の通りを良くするための遊び」と説明され、紹介されていた例は、飛行機遊びや腕鉄棒、シーツブランコなどの昔から親子が触れあって遊んでいた内容であった。私は研修を受けながら、父に飛行機遊びをしてもらったこと、そしてその楽しい遊びの経験から親戚の子どもに同じように飛行機遊びをしてあげたことなどを思い出していた。講師の中川氏は「言葉の発達は、身体が健康で心を育てることが大切である。叱ったり注意することよりも、身体を動かす遊び・安心できる環境・楽しさ、笑顔を大切にしたい。」と話していた。私は、親から子へと受け継がれていたような楽しい遊びが言葉の種となっていたことをこの研修で知ることができた。

近年、子育てが伝承される機会が少なく、子どもとの関わり方が分からないという保護者が増えてきているという。このような育児環境の変化により、これまでのような親子が触れあって遊ぶという経験が少なくなっているのではないかと考えた。また、教えるや習うなどの学習面にとられるあまり、親子で楽しむことや子どもを笑顔にすることの大切さに気づいていないのではないかと考えた。保育所保育指針によると「一人ひとりの保護者の状況やその意向を理解、受容し、それぞれの親子関係や家庭生活に配慮しながら、様々な機会をとらえ、適切に援助すること」と記されている。つまりは、保護者と連携して子どもを支えることが必要であり、保育園で経験を補っていくことやその子どもに与える効果を保護者に発信していくことが保育園の役割である。そこで、私は、もっと感覚統合を理解し、保育に取り入れていきたいと強く思った。よって、感覚統合について、および保育実践とその結果についてここに報告する。

2. 感覚統合とは

1) 感覚統合とは

アメリカの作業療法士エアーズがまとめた、発達障害のある子へのリハビリテーションを感覚統合療法という。先に述べた中川氏が「脳の中の電線の通りを良くするための遊び」と表現していたのは感覚統合療法のことであると理解した。

感覚統合とは、「生活の中で、さまざまな感覚器官を

通じ、絶えず身体に入ってくる複数の感覚（五感・固有受容覚・前庭覚など）を正しく分類・整理し、取り入れる脳の機能」のことである。この機能により、その場その時に応じた感覚調整や集中が可能になり、周囲の状況の把握とそれをふまえた行動（自分の身体の把握・道具の使用、人とのコミュニケーションなど）ができるようになる。木村氏はそれを「脳の中に流れ込んでくるさまざまな感覚情報を『交通整理』する働き」と表現している。例えば、講義を受ける際、脳内で『交通整理』を行うことで、外の人々の声や、近くを通った自動車の音などの情報が遮断し、講師の声に注意を向けることができる。これが「適応力が発揮された状態」と言える。

2) 適応力とは

木村氏によると適応力は「その時、その場、その状況に合わせる力」と表現されている。適応力は4つの柱が元となって発揮される。

（適応力の4つの柱）

- ①コミュニケーションスキル（意図理解力・自己表現力）
- ②行動スキル（注意力・問題解決能力）
- ③アカデミックモデル（読み書き計算、思考能力）
- ④モーターモデル（全身運動・手先の巧緻作業）

3) 感覚統合で重視する3つの感覚

上記の適応力4つの柱につまずきがある場合、以下の感覚についてトラブルがあると考えられる。

①触覚

触覚防衛反応：生活面での拒否

身につける物への拒否やこだわり

自分からは触りにいくが、触られることは拒否する。

触れる素材にこだわりがある。

②平衡感覚（前庭覚）

ゆれや回転、重力を感知する感覚のこと。

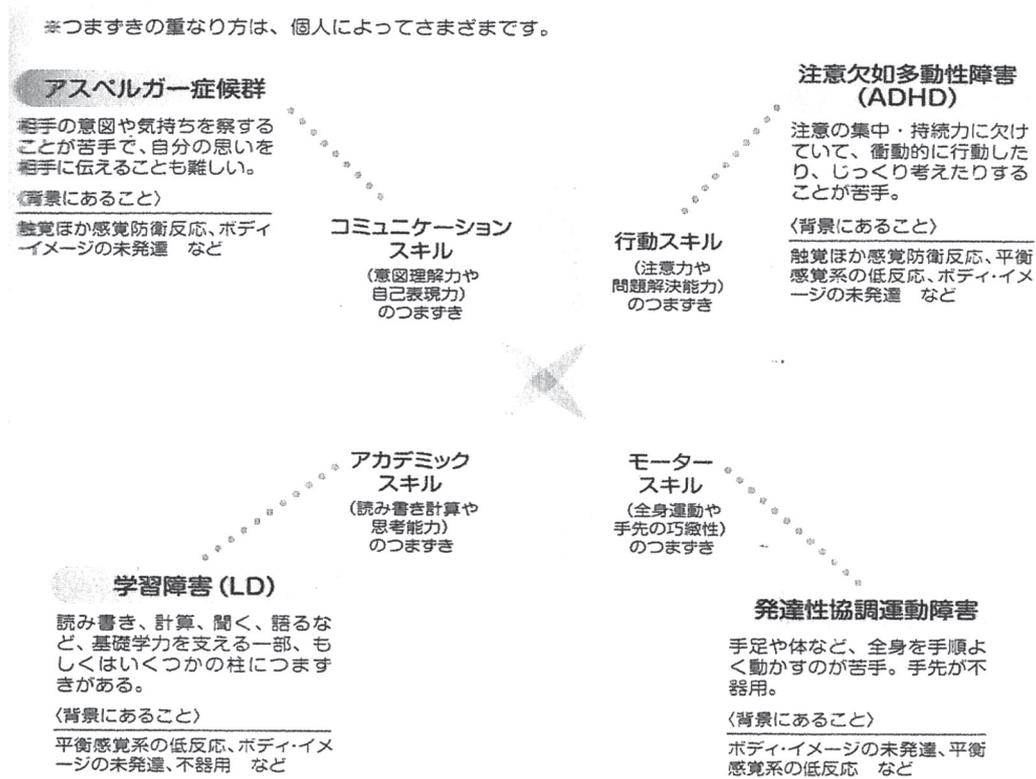
三半規管や耳石管による情報が脳内で整理された後、眼球運動・姿勢調節・自立神経系の回路に引き継がれる。

③固有覚

筋肉や関節の運動に関する感覚のこと。

力の入れ具合や、関節の曲がり具合などの情報を脳に伝達する。

(図1) 適応力の4つの柱のつまずきと発達障害および感覚統合のつまずきとの関係



以上の3つの感覚は、自覚しにくいいため、そこにトラブルが現れる症状や不適応行動が感覚のつまずきによるものだと分かりにくいいため、誤解されやすい。そこで、感覚統合のアプローチが大切となる。

4) 適応力と感覚統合の関係

図1のように適応力のつまずきの背景には感覚統合のつまずきがある。よって、私は感覚統合の視点を持って、子ども達を観察することで、発達を促すことができるのではないかと考えた。そこで、子ども達への保育活動の検討を行い、子どもの発達についての観察と保育実践を行った。なお、私は発達障害としての支援ではなく、子どもの感覚の発達を促すための保育活動として行ったことを理解していただきたい。

3. 事例報告

1) A君の場合 (3歳男児)

①入園後の成長状況

1歳で歩行開始する。1歳半で、喃語および身振り・手振りで意思を伝えている。運動機能に関しては、発達の遅れがないことに反し、体操など音楽に合わせて身体を動かす活動に関しては、参加せずにいることが多い。就寝時間が22時～23時と遅く、午睡時に寝起きが悪い。午前中はボーっとしていることが多く、夕方には活動的に過ごせることから、就寝時間を早めていただけよう家庭へ依頼をした。2歳4ヵ月、保育者が言ったことを語尾だけ繰り返す。1字ずつ復唱させ

ると、1字は発語できるが、単語として話すように促すと語尾しか言えない。また、「かゆい」を「かいかい」というなど、意味を持った単語を話すようになる。銃声音など興味がある音真似は非常に上手で、舌の使い方にぎこちなさは感じられない。この頃から、ブロックでゲームのコントローラーを作ってゲーム遊びの真似事をしたり、鉄砲を作っては一方的に友達を撃つ真似をするようになる。活動中に寝転がっていることが多く、おやつや給食などが終わると立ち上がり、移動する姿が目立つようになる。3歳ごろには2語文、3語文を話すようになるが、1語ずつつけて話す特徴的な話し方をする。この頃から、保育者にも自分から話しかけるようになり、やり取りを楽しめるようになる。しかし、椅子から立ち上がることはなくなったものの、腰を浮かせたり、机に突っ伏すなど常に姿勢が崩れており、製作活動も集中力が続かない。

②保育活動の検討

私は、本児が意思のやり取りができ、成長発達の遅れはみられないのに対し、言葉の発達が遅いことが気になっていた。「子どものこころとことばの育ち」の研修に、興味を持ったのも本児がきっかけであった。研修に参加してみて、言葉の発達の基盤は、規則正しい生活と豊かな経験であることが分かった。本児は、就寝時間が遅く、日中の活動に支障が出ていることや兄が行っているゲームやユーチューブを見る機会が多く、経験が偏っているという家庭環境も影響しているのではないかと感じた。また、本児は、身体を動かす

ことは好きであるのに対し、体操などの模倣して活動することに対して抵抗を感じている様子であった。さらに、姿勢の維持ができず集中力に欠ける面が見られる。そこで、モータースキルと行動スキルのつまずきがあるのではないかと考えた。モータースキルと行動スキルの背景には、共通して平衡感覚の低反応があげられている。そこで、本児に対し、平衡感覚を育てる遊びを実施することで、経験を増やし、言葉や姿勢維持の発達、および集中力の向上につながるのではないかと考えた。

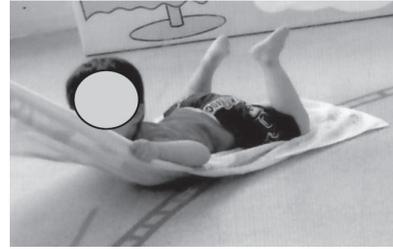
③保育実践と結果

ケース会議で、職員に感覚統合についての情報提供をおこなった。その上で、本児のクラス担任に「魔法のじゅうたん」という遊びを取り入れてもらった。「魔法のじゅうたん」とは、バスタオルを床に置き、その上に子どもを乗せ、大人が引っ張るとい遊びである。「魔法のじゅうたん」を初めて行った時には、本児の表情は硬く不安を感じているように見えた。友達がやっているのを見て、興味は示しているようであったため、腹臥位にし、ゆっくりと行うよう提案する。次の写真は、初めて本児が「魔法のじゅうたん」を行った場面である。カーブにさしかかるとバランスを崩して倒れてしまった。同じ年齢の子ども達と比べ、回転に対する姿勢の調節が苦手であることが明確となった。



その後、クラス担任は、テーブル坂や布団、平均台などを使った姿勢の調節に有効な全身運動を多く取り入れた活動を行っていた。全身運動は動きがパターン化されると、感覚が刺激されないため効果がなくなるという。動きに変化を持たせたことは有効であったと考える。

次の写真は、1週間後、本児が「魔法のじゅうたん」を行った場面である。前回行った時の、こわばった表情が取れ笑顔が見られる。また、しっかりと姿勢を維持することができており、カーブでも体勢を挙上することができている。



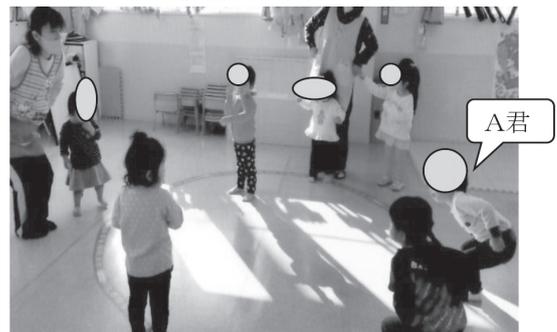
現在、本児は言葉も発達し、保育者に声を掛けずに自分で判断してしまう場面が少なくなり、自分から積極的に話しかけるようになった。また、体操に関しても、興味がある音楽に対しては模倣できるようになった。模倣ができるようになったことは、平衡感覚を育てる遊びがボディイメージの向上につながった結果であると考えられる。

<体操の時間における本児の変化>

①6月時点での体操の時間



②2月時点での体操の時間



2) ひよこ組(0歳児クラス)による平衡感覚への支援

①保育実践と結果

ひよこ組において、平衡感覚を育てる遊びをおこなった。遊びの内容は「魔法のじゅうたん」「丸太バランス」「シーツブランコ」「ぐるりんぱ(大人が子どもをでんぐり返しする遊び)」「飛行機遊び」「トランポリン」などである。また、全身運動として、テーブル坂や緩衝剤、布団の上での活動を行った。ここでは、ひよこ組での平衡感覚を育てる遊びの大切さを実感した事例を紹介する。

次の写真は7月2日に「丸太バランス」を行った場面である。2人の子どもの「丸太バランス」における反応の違いを見ていただきたい。



左の写真は1歳2ヶ月の児、右の写真は9ヶ月の児である。私は、この反応の違いに大変驚いた。月齢がこんなにも違うのに対し、平衡感覚における反応がまるで逆であったのである。1歳2ヶ月の児は、この時点でまだ歩行開始されておらず、1秒程度しか立位を保持できない状態であった。一方、9ヶ月の児は、ずり這いでの移動である。この9ヶ月の児はこの2週間後につかまり立ちを始め、1歳1ヵ月で歩行開始した。

乳児の運動機能の発達は、6ヵ月ごろには座位、10ヶ月くらいにつかまり立ちができるようになり、1歳過ぎると全身の筋緊張が調節できるようになり、1歳を過ぎる頃には歩行が可能となる。これは、平衡感覚系を中心とした脳の機能が発達することで起こるといえる。以上のことを理解する上で、非常にわかりやすい場面であった。よって、乳児期の子どもたちにとって、平衡感覚を育てる遊びは非常に重要な体験であり、保育者は意識して取り入れていかなければならないと考えた。

次の写真は、先程の1歳2ヶ月の児が1歳3ヵ月となり、10歩ほど歩けるようになった時の写真である。平衡感覚が育ち、姿勢の維持ができるようになっていくことをご理解いただけるだろう。



3) Cちゃんの場合(1歳4ヵ月女児(1歳0ヵ月で入園))

①入園時点の状態

本児は入園当初、1歳0ヶ月でコップや食具を握ろうとはせず、補助しようとする手を払いのける動作を見せた。手づかみ食でも自分からしようとせず、食べたいときには泣いて訴えるか、皿に手を伸ばしてひっくり返すなどの行動で示している。

②保育活動の検討

連絡帳による母からの情報だと赤ちゃんの時から手を払いのける動作は続いており、母は「赤ちゃんだから、そのようなしぐさをするのだろう」と思っていたと言う。製作時に絵の具を掌に塗ると泣いて嫌がる。玩具などは、自分から手を伸ばし触れたり握るなど運動動作としての発達は順調といえる。以上の行動から、触覚防衛反応ではないかと考え、触覚に対するアプローチを行うこととした。

③保育実践と結果

歌を歌いながら、身体をマッサージするふれあい遊びを行うと、笑顔を見せ機嫌が良い。そこで、掌のマッサージを行ってみる。初めは払いのけようとするものの、ゆっくりと掌を包み込み、声を掛けながらマッサージすると受け入れてくれるようになる。15~20分程度、マッサージを続けたところ、その日の給食時、自分から食具を握ることができた。マッサージを受け入れられるようになると、保育者の手を握ったり、保育者の補助も嫌がらなくなり、製作や食具の使い方、コップ飲みも補助で行えるようになる。

団子さしを行った時も、感触に驚き手を引っ込めてしまったが、保育者が見本を見せ、その後一緒に掌を包み込むように握らせてみると、握ることができた。さらに、一度感触に慣れることができると、自分から触ろうとする姿も見せる。

触覚防衛反応の問題点として共感性の発達が阻害されることがあげられる。保護者とふれあい、関わりながら共感性が育まれる大切な時期に、生理的な症状である触覚防衛反応が出てしまうと、スキンシップをはじめとしたふれあいを拒否するため、心の働きとしての共感性が育ちにくくなってしまふ。結果的に対人関係、コミュニケーションの発達にゆがみが生じてしまうのである。そこで、タッチングなどにより識別系の働きを強化することで、原始系にブレーキをかけることが必要となる。識別系とは目で確認しなくても触れた素材や形、大きさ、位置を弁別したり、自分の身体のどの位置に触れているかを感知するときに用いる機能である。原始系とは本能的な触覚機能で、対表面からの感覚情報をもとに本能的な行動をコントロールする機能である。今回行った、マッサージやふれあい遊びなどはこのような識別系の働きを強化するのに有効であったと考える。また、製作活動において使用する絵の具や粘土、今回触れた団子などの様々な素材に触れることも、また同様である。

一般的に触覚防衛反応のピークは2~3歳であるといわれている。同時に、共感性の発達も2~3歳までに著しく発達するといわれている。本児は1歳で入園したことで、触覚に対しての支援を行うことができ、触覚防衛反応が和らいできている。連絡帳においても、「スプーンが持てたと聞いてうれしかった」「コップ

飲みができるようになった」「いただきますができるようになった」など、成長を喜んでいる様子が伺える。今後もスキンシップを大切にしながら、経験を増やしていきたい。

3. おわりに

今回、感覚統合を知ることで、言葉の発達だけでなく、全身運動や集中力の発達、触覚防衛反応を和らげることができることが分かった。少しずつではあるが、成長発達に良い効果を与えることができていると実感している。特に、ひよこ組においては、平衡感覚を育てる遊びが非常に重要であり、その後の成長発達に良い影響を与えることが分かった。現在も、「シーツブランコ」をすると反り返ったり、ブランコをしたあと歩行がふらつくなど平衡感覚につまずきがあると考えている子どもに対し、平衡感覚を育てよう心掛けている。まだ、明らかな効果はみられていないが、平衡感覚遊びも「シーツブランコ」や「丸太バランス」は嫌がるが、「飛行機遊び」や「ぐるりんぱ」は喜び、繰り返しやって欲しいと訴えるようになってきた。このように、個別に合わせて感覚統合アプローチを行うことによって、過敏に反応していたこともじきに和らいでいければ、その子どもの発達を促して

いけるのではないかと考えている。今後も継続して取り組んでいきたい。

また今回、ケース会議において、情報の共有を図れたことで、職員の協力を得ることができた。共に、保育実践を行ってくれた職員に心より感謝する。保育所保育指針によると「職員が日々の保育実践を通じて、必要な知識および記述の習得、維持および向上を図るとともに、保育の課題などへの共通理解や協働性を高め、保育所全体として保育の質の向上を図っていくためには、日常的に職員同士が主体的に学びあう姿勢と環境が重要であり、職場内での研修の充実がはからなければならない」と明記されている。このように、保育に関し、共に考え、実践していく仲間がいるということで、もっとより良い保育を行っていきたいと考えることができる。お互いに、学んだことや子ども達の成長発達を共有し、共に実践し、喜びを分かちあえるように心掛けていきたい。

<参考・引用文献>

- 1) 「子どものこころとことばの育ち」中川信子、大月書店
- 2) 「保育者が知っておきたい発達が気になる子の感覚統合」木村順、学研
- 3) 「保育所保育指針」厚生労働省

講評：感覚統合の視点を持った保育

評者：小林 芳文

親子の触れ合いに目を向けて、保育に楽しい遊びを取り入れるという考えの研究に賛同しました。

子どもの発達支援に、楽しさやアクティブなアプローチによる実践をすることは当を得ています。ただ、貴園の保育として、医療の作業療法の領域で使われている感覚統合の視点を入れたことに少し疑問を持ちました。なぜなら、どうしても訓練的な要素を持った活動や保育遊びになってしまいがちだからです。研究報告にもその部分が出ており、子どもの生き生きとした笑顔の姿や遊びの喜びや楽しさが薄れてしまい、テーマで挙げている研究には結びついていないように思いました。本来、アメリカのJ. エアーズにより提唱された感覚統合理論には、遊びの要素は含まないことになっていることを申し添えます。また、「こころやことば」の保育支援でなぜ感覚統合なのかその根拠が伝わって来なかったのは残念でした。今後の研究に期待したいと思います。

評者：天野 珠路

研修で学んだことを受けて、文献を読んで学び直し、感覚統合の視点を持って子どもを観察した記録です。じっくりと観察し、理論と照らし合わせたことで子どもへの理解が深まり、保育者の学びになったと思われれます。

作品の中で、子どもができないこと、他児と比べて劣ること、家庭の環境について等、やや否定的な記載がありました。また、訓練的な感じを受けてしまうところもあり、保育の楽しさや面白さがあまり伝わらず、残念でした。もっと楽しく快活に、子どもが喜びながら結果として発達が促される実践を模索していくとよいでしょう。実践を

裏付ける理論を学んだり、知識を実践に活かしたりすることはもちろん今後も続けてほしいと願っています。

評者：田和 由里子

「感覚統合」について学ばれた内容を詳しく説明をされていました。発達障害としての支援でなく全ての子どもの感覚の発達を促すための保育活動として取り組まれていました。乳児であれば体をマッサージするところから始まり、身近にあるバスタオルや運動用具のマット・丸太などを使用して平衡感覚を育てる遊びを取り入れたりされていました。全身運動や集中力を養う活動をすることにより体の機能を発達させまた、言葉などの発達にも影響を及ぼすことが理解できました。写真による変化がわかりにくい部分もありました。(プライベートの関係もあると思いますが、顔の表情から得られるものもあると思われれますので、次回にいかせたらよいと思われれます。) また、検証期間が短いようにも思えたので、引き続き保育実践を行うとより良い取り組みができると思われれます。

保育室ジャングル計画 ～昆虫に夢中！集中！成長中！～

東京都・羽村まつの木保育園 中村 鮎美

1 はじめに

本稿は虫好きな担任との出会いから始まった子どもたちの変化や成長を記録した実践報告である。保育環境を子どもたちの興味関心によって柔軟に変化させ、身近な自然を保育室内でも感じられるよう設定していた。また、保育者も大切な保育環境の一部と考え大人主導の保育ではなく、子どもたちの探究心にとことん寄り添う事を大切にしながら日々の保育に取り組んでいる。本稿では本園の保育方針でもある「子どもファーストの保育」と「保育士の得意を生かした保育」を融合させた保育実践について報告したいと思う。



1・1 クラスの状況

5歳クラスになり、子どもたちは「保育士14年目・虫好き」の担任と生活を共にするようになる。年度当初は慣れない担任に自分の気持ちを伝える事も少なく、見えないところでトラブルになっている事も多い状況にあった。また年長クラスの発達段階にしては他児への興味も薄く、自分の世界を楽しむ段階の子どもたちも多く見られた。日々の生活の中でも、発達に凸凹があり配慮を要する子、落ち着きのない子、そして何より何かに熱中・集中している姿を見る事が少ない印象を受けていた。しかし、とても明るく楽しい事が大好きなクラス。個性豊かな子どもたちとの大切な1年。短い時間ではあるがクラスとしてまずなにかから取り組むべきなのか、考える日々が始まった。

1・2 年度当初の取り組み

まず、室内玩具の見直しを行うためカラフルな色の玩具を木製に切り替えた。形の出来上がっているような簡単な玩具から考えながら見立て遊びや組み立てを楽しむ玩具を多く設定し、遊びの中で考える習慣が身につくよう配慮した。また担任の好きな昆虫の飼育を視野に入れ、虫かごや虫あみの準備をした。しかし当初の子どもたちにとっては虫かごも虫あみも興味の対象ではなかったので、保育室には常設せず園の共有スペースに設定してい

た。そんな中、春のある日。園庭にある金柑の木にアゲハ蝶が卵を産み、小さな幼虫になっているのを子どもたちと一緒に発見した。

2・1 保育士の得意を生かした保育

蝶の幼虫が好きで毎年何匹も羽化させている担任としては、ぜひ年長クラスでこの幼虫を羽化させたいと思い保育室に持ち帰った。そこで子どもたちにもよく見えるよう透明ケースに飼育環境を整えた。幼虫の飼育が初めての経験だった子どもたちも多く、興味津々にケースを覗き込む姿があった。しかし、この時にはまだ命に対する意識も低く昆虫に対する知識も無いためむやみに触ろうとする子、気持ち悪がる子など様々な反応が見られていた。初めての飼育は担任が世話をする事を伝え、まずは私自身が大切に育てる姿を子どもたちに見てもらおうと考えた。雨の日も風の日も新鮮な葉を採り、幼虫にあげている姿をまずは見てもらいたいと考えていた。

2・2 探究心の芽生えから生まれる変化

日々大きくなる幼虫の変化を楽しむ担任の姿を見ていた子どもたち。飼育を初めて1週間が過ぎた時、黒色だった幼虫が緑色のアオムシになっていた。「昨日と色が違う！」「どうして？」「図鑑で見たことある！」と幼虫の色が変わった事をきっかけに少しずつ虫好きの子どもたちが輪に加わるようになった。アオムシをじっと見ていると新たな発見もあったようで、気がつく担任を含む虫好きが数名集まり毎日アオムシの観察をするようになっていた。すると1人の子どもが「蝶になった時、花がないと死んじゃうんじゃない？」と昆虫仲間に投げかけている。担任としては子どもたちの興味が広がっている事を感じていたので、この頃から子どもたちの目につく場所に「虫の図鑑コーナー」を設置していた。また共有スペースにあった虫あみをこっそり保育室内に移動させた。そして部屋を出てすぐのスペースに虫かごを置いて様子を見ていた。子どもたちの間では「このアオムシはどんな花が好きなのか？」「どんな模様の蝶になるのか？」など、もっと知りたいという探究心の芽生えが見られるようになった。そして日々の生活の中でも子ども同士の会話量が増え、自分の考えや疑問を人に伝えようとする姿を感じる事が多くなった。少し前までは数名集まると必ずトラブルが起きていた遊びの時間も、虫を囲み虫についての会話をする時間が増える事でトラブルも

減り、意見交換の時間が増えていった。また、以前は一つ一つの遊びがすぐに途切れてしまっていたが、夢中になる楽しさを少しずつ感じる事で普通の遊びが長く続き、発展を見せるようになってきた。年度当初は室内にあってあまり使うことのなかった木製の玩具が人気になり、数名で意見を出し合いながら一つの物を完成させるプロセスを楽しめるようになった子どもの姿もあった。

3・1 保育室ジャングル計画のスタート

子どもたちの会話を聞きながら担任も一緒に考えるようになった。そして「蝶になった時喜んでもらえるお部屋にしよう！」と保育室ジャングル計画が始まった。まずは室内に大きな観葉植物を置いた。今までは「危ない」「保育の妨げになる」「なるべくスッキリと」など大人の考えで保育環境を設定してきたが、子どもたちからの発想をもとに、その理想になるべく寄り添えるよう考えた。観葉植物を置き、花を飾り、水槽を置き今までの保育室のイメージをガラリと変えるような環境設定を行なった。子どもたちは「ジャングルみたい！」「これなら蝶が飛べる！」と大興奮し、「もっと調べてみよう」と毎日図鑑で蝶について調べていた。担任もなんだか楽しくなり、毎日保育室の環境設定について考えていた。ワクワクする気持ちを子どもたちと共有出来ているようで、保育園に出勤するのが楽しみだった。

登園すると毎日誰かが虫を飼いたいとクラスに持ってくるようになる。その度、皆で必要な環境を調べ、餌の確保や散歩先について意見を出し合っていた。この頃になると以前は担任になかなか思いを伝えられなかった子どもが「今日はバッタを捕まえたいから〇〇公園に行きたい」「虫あみ持って行きたい」など次々と自分の意見を伝えてくれるようになっていた。

事例1

Aちゃんの事例。4歳クラスでは登園拒否などがあり、母子共に登園時に疲れ果てている親子がいた。5歳クラスでも当初は登園拒否があり泣いて来る事も多かった。しかしクラス内で幼虫の飼育が始まり本児もそれに興味をもち、登園すると必ず虫かごの前で他児と幼虫の観察をしながら成長を楽しむ姿があった。するとある日、自分の家でも飼ってみたいと母に虫かごを買ってもらい親子で虫捕りに行く。次の日その虫を自分の虫かごに入れ、満面の笑みで登園。初めて自分で捕まえた虫を皆に見てもらい、「クラスで飼育したい」と自分の言葉ではっきりと担任に伝えてきた。そこで保育室に虫かごを置いて観察できるスペース（虫コーナー）を設定。毎日自由に観察できる環境を整えた。数日経つとAちゃんは毎日虫かごを持ち帰り、母と共通の話題で話ながら降園し、次の日またその虫と登園するようになった。気がつくやうに泣いて登園する日はなくなり母もAちゃんの変化を喜んでる。

事例2

外国籍のBちゃん。日本にきて1年程のため、まだ他児との関わりがうまくいかず、トラブルになる事も多い。クラスで虫の飼育が盛り上がりを見せるとBちゃんも興味を示す。しかし、図鑑などを見ても文字が読めないためなかなか友だちの会話についていけない。以前から1人で遊ぶ姿や大人と1対1の関わりが多く、夢中になれる事を模索中だった。そんなBちゃんがある日「コアオハナムグリ」の幼虫を見つける。すると近くにいた虫好きの男の子がBちゃんの代わりに図鑑でその幼虫の名前を調べ、「Bちゃんすごい！」「みんな！Bちゃんが大発見したよ！！」とクラスの皆にBちゃんを紹介していた。そして一緒にその幼虫の住処を作り「クラスで飼いたい」と担任に伝えてきた。Bちゃんは全ての言葉を理解しているわけではなかったが、とても満足そうな表情をしていた。そしてそのコアオハナムグリの幼虫もクラス内で飼うことにした。夏になると幼虫が成虫になり立派なコアオハナムグリになる。するとBちゃんはお昼寝の時も虫かごを自分の布団に持っていき一緒に眠る。日本語での会話が難しかったBちゃんだったが、虫に興味を持ち始めてから「幼虫」「ムシ」などの単語が増えているように見えた。ある時、大切な幼虫が成虫になった時、どんな餌をあげたら良いかわからなかったBちゃん。すると自ら虫好きの男の子に「ごはん、なに？どうやるの？」と聞きに行く姿が見られる。聞かれた男の子もすぐに図鑑で調べ、昆虫ゼリーを虫かごの中に置いてくれた。いつもならトラブルになりそうな程の近距離でのやり取りだったが、2人が同じ目的を持ち夢中になっている時間にはトラブルも起こっていない。

事例3

ミスジマイマイのカタちゃん。今まであまり虫に興味のなかったCちゃん。ある日「おばあちゃんが捕まえてくれたの」と大きなカタツムリを持って登園する。すぐに図鑑で調べ「ミスジマイマイ」だとわかる。カタちゃんと言って名前をつけ「クラスで飼いたい」と担任に伝える。そこで「先生はカタちゃんのお家をどこに置くか考えるね」と伝え、Cちゃんの次の行動を待った。すると「何を食べるのか？」「何が必要か？」と今まであまり興味なかった女の子たちがCちゃんを中心に図鑑でカタちゃんについて調べ始める。調べる中で「産卵場所が必要」という事がわかったようで、担任とともに虫かごの中に小さなケースを置き、その中に土を入れて卵を産めるよう産卵場所を設置する。担任も初めてカタツムリの産卵を視野に入れて飼育したため土については子どもたちの情報で産卵環境を整えた。Cちゃんが毎日カタちゃんのお世話をする姿を近くで見っていた子どもたち。ある日Cちゃんが欠席すると「Cちゃんが大事にしているカタちゃんが死んじゃったら大変。Cちゃんが悲しむよね。今日は私がお世話する！」と自らカタちゃん

のお世話を申し出てくれる子どもの姿があった。皆で世話をした甲斐あって、カタちゃんは友だちも増え、秋には土の中に産卵し、今では数匹のミニカタちゃんも誕

生している。初めて土の中に卵を見つけた日、子どもたちと大声で喜んだ。



写真1 保育室での昆虫観察の様子



写真2 住処を作った後の観察

3・2 昆虫飼育がもたらしたクラスの変化

クラス内には数多くの虫かごが並び、子どもたちが日々たくさんの昆虫を見つけては飼育するようになった。保育者も保育環境の一部となり子どもたちと一緒に飼育環境や室内環境について考えた。その結果、夏にはセミの声を聞き、秋には鈴虫やコオロギの鳴き声を楽しみながら生活する保育室となった。子どもたちの探究心にとことん寄り添いたいと考えながら、自身の昆虫好きも大いに発揮できる環境を日々研究していた。そんな日々を過ごす中で大きく感じた子どもたちの変化としては、

- ①「自分の思いを人に伝えようとする姿が増えた事」
- ②「どうする？何する？と子ども同士が話し合う姿が増えた事」
- ③「散歩先に明確な目的を持って出かけるようになった事」（例えば・・・今日はカマキリの餌を捕りに〇〇に行きたい・雨が降っているから〇〇が見つかるかもしれない等）そのために何が必要か？虫あみや虫かご、図鑑、時にカップなど散歩に必要そうなものを自分たちで準備する姿も見られるようになっていった。
- ④「虫の名前を書きたいと文字を覚えようとする子」「絵の具で好きな虫の観察画を楽しむ子」「虫の知識を友だちに教えようと本を作る子」など、どの子も自分なりの楽しみ方を見つけながら自発的に活動する姿が多く見られるようになったと感じている。

事例4

「昆虫屋敷」。毎年夏の恒例行事として年長組による「お化け屋敷」がある。今年度は自分の好きな昆虫になりきって「昆虫屋敷」を計画した。各々が図鑑を見ながら好きな昆虫のコスチュームを製作。コンセプトとしては「小さなクラスの子たちにも虫をいじめないで優しくしてほしい」という子どもたちなりの思いが込められていた。カブトムシなど人気のありそうな昆虫ばかりになるのかな？と思っていたが、日々様々な昆虫の知識を得ている子どもたちは担任の予想を遥かに超え個性豊かな昆

虫たちに姿を変えていた。製作途中もとても楽しく、足の数や羽の色を調べるなど皆で夢中になった。子どもたちは廃材を使って製作した自分のコスチュームを「昆虫スーツ」と呼びそのスーツを着るとすっかりその虫になりきって細かな特徴まで真似をしながら楽しんでいた。「僕たち天才！！だってこんなにすごい昆虫スーツが作れちゃうだもん！」と、どの子も自分の作品に自信を持ち、完成すると昆虫スーツを着た子どもたちは保育室を飛び出し園庭や園内を散歩していた。女郎蜘蛛になりきって登り棒に登る子、セミになりきって柱にしがみ付



写真3 セミ取りのため長い虫あみを準備した散歩

く子など、皆思い思いの昆虫生活を楽しんでいるように見えた。そして「昆虫屋敷」当日はもちろんどの子も昆虫になりきって迫真の演技を見せていた。他のクラスからも「今年の年長組らしくていいね！」と言ってもらえる事が出来、クラスの良い思い出となっている。



写真4 雨のためカップを準備した散歩



写真5 バッタになりきっての生活



写真6 虫たちの集合会議



写真7 保育室を飛び出した虫たち（女郎蜘蛛・アブラゼミ・ゴマダラカミキリ）

3・3 昆虫採取から見える友だち理解

日々虫捕りあみと虫かごを持って散歩に出かける中、徐々にクラス内で役割分担が成立してきた。これは担任が決めた役割ではなく子どもたちの中から生まれた「虫捕りのための分担」である。その様子を見ていると実に手際よく昆虫採取する集団になっており、担任としても毎日感心させられていた。

どんな分担になっているのか以下で説明する（子どもたちの言葉で紹介します）。

- ①「虫かごくん」常に虫かごを持ち歩き、虫あみ部隊が確保成功するとどんなに遠くからでも駆けつけ、虫かごに虫を入れる係。これはどんな虫でも手で捕まえられる人が選ばれているようだった。また、子どもたち曰く耳が良くどんな遠くからでも「確保ー！！」と声が聞こえたらすぐに駆けつける事ができる人を選んでいるとの事。理由を聞いて笑いそうになってしまったが、子どもたちは真剣なので担任としてもうんうんと頷いて聞いていた。
- ②「虫あみ部隊」虫あみでひたすら虫を追いかけ、確保する部隊。これはやはり足の速い子が選ばれているの

かな？と思ったがそうでもないようで、「トンボならこの子が名人！だって坂道走るのが一番速いんだもん」「バッタはこの子が名人！草むらですぐにバッタ見つけられるんだよ」「蝶はこの子が名人！だってカラアゲハ捕まえたんだもん！」と、虫ごとにきちんと役割が分かれそれぞれがその分野で活躍し、周りもそれを認めている姿があった。また、自身もその昆虫にだけは自信があるようで「トンボ名人きました〜」「セミ取り名人です〜」と言いながら皆の前に登場する。そこでも笑いそうになったが、名人達に道をあけながら担任も他の子どもたちと一緒に確保の瞬間を待っていた。

- ③「昆虫研究所」虫の名前を調べる係。いつも図鑑を持ち歩き、確保成功するとすぐに名前を調べ始める。ここでは虫は触れないけれど文字は読める子や、昆虫についての知識が豊富な子、少しずつ興味が出てきている子が活躍していた。

このように散歩先に到着すると採取したい昆虫によって役割に分かれ、数に限りのある虫あみ・虫かごの順番もスムーズに決まるようになっていた。ただ散歩に行っ

て昆虫採取しているのではなく、その中には子どもたちなりの世界があり役割を持ってクラスの一員になる事で生まれる責任感や達成感、また今まで知ることのなかった他児の思わぬ才能や特技を知る事によるリスペクトの気持ちが多く芽生えていることを強く感じる事が出来た。

春頃は昆虫にあまり興味がなく、数名でのやり取りだったが秋になるとクラス全体が虫捕りに夢中になり、自

分なりの関わり方で昆虫と関わっていた。確保した昆虫は全てジャングル保育室に持ち帰り、飼えるものには住処を作り、飼うことが出来ない時には観察したり絵を描いてから園庭に逃していた。虫かごの中の昆虫を散歩先で逃すのではなく、自分たちの基地に持ち帰る事が出来るという事にも意味があり、探究心や意欲的な行動に繋がっているようにも感じていた。



写真8 役割分担してのハンティング



写真9 昆虫の研究



写真10 昆虫の研究



写真11 カマキリの餌探し

4 「繋がり」と「広がり」

保育室ジャングル計画は年長組だけでなく年中・年少組の子どもたちにも変化をもたらしている。年長組が保育室全体を大きな虫かごのように設定し、子どもたちが主体的に活動する姿を見ている年中組の子どもたち。毎日年長組の保育室を覗いては「何をしているの?」と気になり声をかけてくる姿があった。その姿がやがて「これ見て!」と自分たちも散歩先で見つけてきた昆虫を見せてくれるようになる。するとその昆虫について年長組の子どもたちが「この虫は〇〇だよ。」「餌はね・・・」と自分たちの知識を伝える姿が見られるようになっていった。そしてそれを真剣に聞く年中組の子どもたち。すると、次は園庭で年少組の子どもたちにその知識を伝える年中組の子どもたちの姿がある。またある時は、散歩の時に年長組が長い虫捕りあみを持って出かける姿を見つける。すると「自分たちもやってみたい」と訴える年

中組の姿が見られる。本来なら長いものを持って歩くことは危険だと思い、大人がルールを決めてしまいそうな場面ではあるが、年長クラスへの憧れや子どもたちの意欲を理解し子どもたちと一緒にルールを考え、虫捕り網を持って散歩に出かけるようになる。それを見た年少組もまた「やってみたい」と意欲が湧いてくる。もちろん危険だなど感じる事もあるので禁止してしまうことは簡単だが、保育者も保育環境の一部として考え、年齢に合わせた楽しみ方を子どもたちと考える姿勢が必要だと感じている。年齢は異なるが皆それぞれ自分の世界を楽しみながらも昆虫の飼育という一つ的话题を共有している。異年齢児も含めた子ども同士の伝え合いの中から生まれる思いやりや、伝えるための言葉の工夫も見られている。そのような姿からも年長クラスが夢中になって取り組んでいる昆虫の飼育が園全体にもたらす波及効果は計り知れないと感じている。



写真12 今日の昆虫を振り返る時間



写真13 昆虫の観察画

5 終わりに

初めて羽化したアゲハ蝶をクラス皆で園庭に逃した時、子どもたちは「また保育園の金柑の木に卵を産みに帰ってきてねー！」といつまでも見送っていた。その後、台風や風の強い日には園庭の金柑の木を心配していた。畑の無花果で捕まえたゴマダラカミキリには、雨の日も餌となる葉っぱを切りに畑に向かった。担任も保育環境の一つとして共に生活する中で子どもたちの心の成長に触れ、変化する姿を直近で感じてきた。自分の言葉で伝えた事がクラスの中で認められ評価された時の誇らしげな表情、年下の子に一生懸命伝えようとする優しい眼差し、

初めて自分で捕まえた昆虫に愛着を持って接する姿など1匹の蝶の幼虫から始まったクラスのドラマは担任としての宝物だと感じている。今では多くの保護者も子どもたちの興味に寄り添い、家庭の中で大人も一緒に楽しむ様子が伝わっている。保育者も子どもたちの世界を面白がり、興味の幅を広げるお手伝いが出来たらクラスはもっと変化していくのではないかと日々子どもたちの姿を見つめている。年長クラスとしての残りの時間、子どもたちと更なる研究を続けながら昆虫との時間を楽しみたいと思っている。



写真14 初めて羽化したアゲハ蝶



写真15 僕のオオクワガタ



写真16 コオロギの声に誘われて



写真17 トンボがとまった！

評者：石川 昭義

当園の保育方針である「子どもファーストの保育」をどのように実践しているかをまとめた報告です。虫好きな担任と子どもが出会ったことで、どのような保育が展開されていったのか、そのストーリーはスリリングな印象でした。次から次と発展していく内容は、ある種、プロジェクト保育を彷彿させる内容のようでした。虫を契機に個人のみならず、クラス全体の生活を変化させ、普段の遊びの持続や発展にも影響を及ぼした様子が伝わってきます。

いたるところで子どもたちの気づきや探究心の具体的な姿が描かれていたところがよかったと思います。特に「観察する」という行為が、いかにその後の子どもの行動を活性化させるかに気づかせてくれました。一方で、これだけ虫を中心とした保育内容だと、他の遊びや活動はどのように行われているのかと気になるくらいでした。この活動に関わった5歳児クラスの人数がわかると活動全体のイメージがより膨らんだと思います。

評者：高木 早智子

子どもたちが虫に興味を持つ様子や、「昆虫スーツ」に「昆虫屋敷」の取り組み、子ども同士のかかわりなどが保育者の目を通して、リアルに描き出されていることにとっても感心しました。保育者の得意を活かし、子どもたちが虫に興味を持てるような環境の構成が見事です。まさに「保育者も大切な保育環境の一部」ですね。とても読みやすい文体で、まるでエッセイのようにすらすらと読むことができましたが、筆者の方がご自分のことを「担任」「私自身」「保育者」と複数の表現をされていたので、統一された方が報告書らし

くなると思います。また、添えられている図としての写真から、子どもたちの笑い声や歓声、集中している息遣いまでもが感じられました。このような素敵な写真があるので、これらの写真を軸として各事例をまとめられても良かったかもしれませんね。これからも、子どもも大人もワクワクするような保育実践の報告書をお待ちしております。

評者：日吉 輝幸

虫好きの担任という大前提がありますが、羽村まつの木保育園では昆虫を飼育かごでの観察にとどまらず、子どもの声から保育室全体を昆虫の生息に適するジャングルのように大胆に環境構成を変えています。また、環境構成のみならず「昆虫屋敷」や「昆虫スーツ」へと、子どもたちの発想で遊びがどんどん変化・発展していく様子が大変秀逸だと思いました。また、特に個別対応を必要とする子どもであっても、皆が好きな昆虫をキーワードにして他児と上手く関わっている様子が伺え、これも環境構成の成せる業なのかと感心させられました。しかしながら、実践研究レポートとしては、「繋がり」と「広がり」の項で、他の年齢の子どもたちへの波及効果について、更に詳細な記述があるとより良かったのではないかと思います。なお、今回の実践のように、担任の自由な発想や主体性を生かしてくれる園の方針や風土が、とても良いのではないかと羨ましく思えたレポートでした。今後更なる活動の実践報告を期待しています。

園内研修からの保育者の振り返り、次へのステップ

東京都・府中めぐみ保育園 井上 美幸

1 はじめに

当園は0、1、2歳児の乳児保育園である。職員は乳児保育の専門家として、より知識と温かい関わり方を高め、“ていねいに、やさしい保育”に取り組んでいる。その一つとして、担任に関わらず全職員が全園児を語れるよう、研修を通して全園児の姿を共有し、その園児に必要な保育を語る力を培っている。

2008年に改定された保育所保育指針には第7章職員の資質向上3(1)に専門性を高める研修に「保育所内外の研修を通じて必要な知識及び技術の習得、維持及び向上に努めなければならない」と記されている。2018年に改定された保育所保育指針では第5章3(1)職場における研修には「職員は日々の保育実践を通じて、必要な知識及び技術の習得、維持及び向上を図るとともに、保育の課題などへの共通理解や協働性を高め、保育所全体としての保育の質の向上を図っていくためには、日常的に職員同士が主体的に学び合う姿勢と環境が重要であり職場内での研修の充実が図られなければならない」と記されている。当園では保育所保育指針をもとに2017年から「各自の保育の見直しと見直しからの保育の質の向上を図る」ことを柱として園内研修を年間計画にそって実施している。

また2020年以降、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため外部研修が大幅に減り、学ぶ機会が減少した。そのため職員は積極的に学ぶ機会として、園内研修の重要性を強く感じている。ある年度における当園の園内研修の実施状況を図1のとおり示す。

2 研究の目的

保育者は日々の保育の中で、子どもたちが安心して楽しく過ごせるように全園児に声掛けをしているが、中には自分が声を掛けると泣かれたり、嫌がられたり反応がなかったりすることがある。それに対して他の保育者が声をかけると子どもが笑顔になる、抱き着いていくという場面がある。この研究ではこのように保育者が子どもとの関わりにおいて心で感じる事、つまり距離感をそのまま“子どもとの距離”とし研究をすすめる。

子どもとの距離は目に見えるものではない。またものさしで測れるものでもない。そこで図2のとおり、オリジナルの図を用いて保育者の心の動きも調べたことで、保育者はこの距離をどのように感じ対応するか、子どもとの関わりを振り返り、今後どのように関わるかを模索

することで心の距離を縮められるのかを考えるきっかけとする。

3 仮説

保育者が保育する園児は複数人数であることから、どうしても子どもとの間には園児側からの距離感のちがいが発生する。一人ひとりに寄り添った保育を行うには、その距離感を小さくすることが欠かせない。

この問題に園全体として取り組むため、全園児を対象に、全保育者による「距離測定」を行い、全職員から具体的意見を出してもらい、どの園児にどういった具体的アプローチが効果的かを調べ、それが改善の具体的なツールになると考えた。

4 研究方法

1. 全職員が図2に自分が感じる「子どもとの距離」を記入する。
2. 距離を調べたあとになぜその距離なのかを項目(図2)に沿って考えて記入する。
記入方法は、一番内側は近い、真ん中は普通、外側は遠いとし、中心の私から、保育者が感じている距離まで矢印で記入する。
3. 全職員が距離となぜそう思ったのかを発表する。
4. 他の保育者の発表を聞き自身の保育の振り返りと共に、距離を縮める改善策を考える保育力を高めていく。
5. 上記の研修を8月と2月に行い、距離や関わり方を比較し、改善の実効性を検証する。

※図外周1～14の番号は児童を暗号化したものである。

※今回は初めての試みのため、8月の記載は園内研修担当者から「4月時点で一番距離が遠かった子どもを選んで書いてください」と伝えている。

2月の記載は8月に行った園内研修で書いた距離と、2月の園内研修で書いた距離で一番距離の変化があった子どもを選んで記入する。

事例1 A保育士(1年目:0歳児クラス担任)

【4月の関係】

新入園児A子を抱っこしても泣きやまない。A子にとって初めての環境であるとはいえ、そのような状況が続いているということはA保育士に対して安心感を感じてもらえていないと考えその子との距離を考えてみた。

XX年度 園内研修プログラム

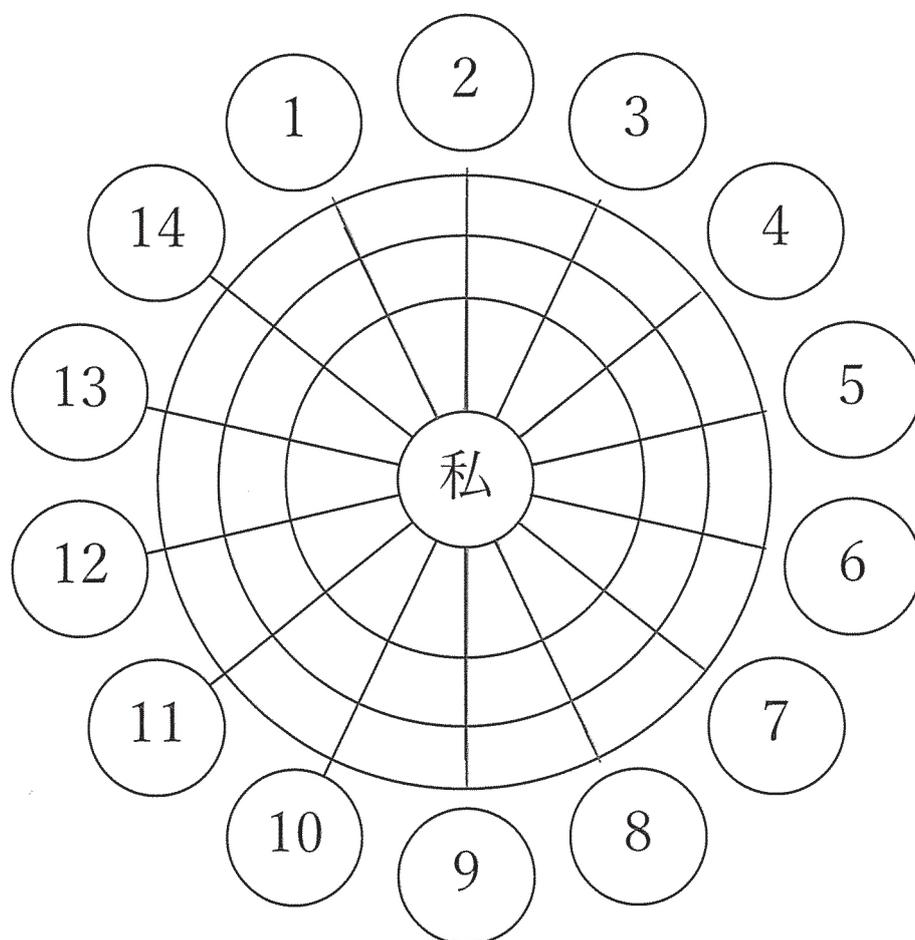
園内研修とは、各自の保育の見直しと、見直しから保育の質の向上を図る。

NO	月日	内容	ねらい
1	5月2日	写真を用いた事例研究 ・小人数のグループ ・KJ法	保育者一人ひとりの子どもの見方の違いを知り、自身の保育の学びとする。
2	6月14日	① 研究テーマ決め（各クラス） ② 折り紙を用いた実践研究 講師：平田保育士	① 日々の保育を振り返り、さらに良くするための研究内容を決める。 ② せかされる子どもの気持ちを知る。
3	7月12日	保育所保育指針解説書を読み各章をまとめ発表する。 序章 井上 第一章：総則 0歳児クラス 第二章：保育の内容 1.2 1歳児クラス 3.4 2歳児クラス 第三章：健康及び安全 保健・給食 第四章：子育て支援 充実 第五章：職員の資質向上 園長・副園長	保育所保育指針の内容を学び、理解し、自分たちの役割を明確にする。
4	8月9日	子どもと保育者の距離① ・保育の実践を用いて、考える。	自分の保育を客観的にみて、振り返る。
5	9月13日	ロールプレイ テーマ：こだわりの強い子(子ども役、保育士役) テーマ：横断歩道で寝転がり泣いている子どもと無言で見つめる母 (泣いている子ども役、母親役、子どもを起こしてあげる地域の人役)	保育の中での子どもの対応と、子どもの対応に困っている保護者への援助の仕方を学ぶ。
6	10月11日	研究テーマ中間発表	研究スケジュールが滞りなく進んでいるか確認すると共に他職員の助言を受ける。
7	12月13日	保育園見学からの学び発表 ・11月…他園見学	子どもの遊びや状況の把握の仕方を学ぶ。
8	1月16日	研究テーマ最終発表	他職員の研究発表を聞き、視野を広げる。
9	2月14日	子どもと保育者の距離② ・保育の実践を用いて、考える。1年間の園内研修を通して、学んだこと、実践したことを発表する。	自分の保育を客観的にみて、振り返る。 自分の学び、他職員の学びを知り、保育に活かす。

私と子どもとの距離 自分の保育を客観的に見て、振り返る

目的 「一人ひとりを大切にした保育」とよく言われているが、それはどういうことなのかを考えるにあたり、子どもとのつながり（向き合い方）に視点を当てて考察する。

方法 4月と現在の子どもとの距離感を直感的に図に表し、その理由（具体的に）、今後に向けて・学びを言語化、明文化する。



- * 具体的な対応：A子が安心感を感じられるように、A子がどのような遊びが好きなのかを模索するとともに、A子からの要求は全力で受け止めるようにしていった。
- * 結果：A子は自我を少し出すようになったり、A子からA保育士に寄ってきてくれるようになった。
- * 今後に向けて：十分なスキンシップや子の求めている遊びをしっかりと受け止めて、感性豊かに関わっていく。
- * 考察：4月の関係を振り返った時に、抱っこをしても泣き止まないという姿から信頼関係を築けていないと考えたという。その様子から一年目ということもあり、子どもとの距離を縮めるために焦りを感じているように伺われた。

【2月の関係】

A子との距離は、8月に調べた時は少しずつ気持ちや思いを表出してきている時期であり、心を開き切っていなかったように感じていたが、現在は縮まったと感じる。様々な場面でA子からA保育士に近寄り喃語などで話しかけてくれるようになった。また抱き着いたり膝に座るなど甘えてくれるようになった。

- * 8月に振り返った時から2月までの関わり：A子から来た時にはA子がいま求めていることは何なのかを考え、気持ちを満たせるよう関わっていった。またA子の様々な気持ちを代弁しながら受け止め、少しでも安心できるように関わった。
- * 今後の具体的な関わり方：遊びやスキンシップを通して、喃語や仕草などからA子の気持ちを汲み取れるようにしていく。また、引き続き安心できる場となるように気持ちを受け止めていく。
- * 考察：4月に比べ、A保育士もA子の気持ちを考えられるようになったことで、A子からA保育士に関わったり、自己表現するようになったと考えられる。

【事例2】 B保育士（9年目：フリー）

【4月の関係】

B子は担任が変わったり、進入園児が増える、そして、保育室も変わったことで不安を感じ泣いている。またB保育士はフリー保育士であるため、B子自身がB保育士に距離を取り、親しく側に来ることはなかった。そのためB子との距離を考えてみた。

- * 具体的な関わり：B子との距離を縮めるためにB子の目線になって、毎日あいさつなどのやりとりを大切にしていた。
- * 結果：B子が好きな遊びに誘ってくれるようになったり、保育補助で入るときにB子から駆け寄ってくれるようになった。
- * 今後に向けて：B子の好きな遊び等から、やりとりなどを大切にして信頼関係を築いていく。

- * 考察：B保育士は経験年数が9年目ということもあり、B子と距離がある事に気付いたタイミングで、B子の目線に合わせて関わっていった。その行動があったことで、B子がB保育士に心を開ききっかけになったのではないかと考えられる。

【2月の関係】

B子との距離は8月に調べた時よりも遠くなっているように感じる。他児とごっこ遊びをしていると「B子もやる」と一緒に遊ぶことは多い。しかし、月が経つにつれて「〇〇先生が良い」と担任を求めることが増えた。

- * 8月に振り返ったときから2月までの関わり：担任を求めた時には無理強いせず遊びの中で関わることを大切にしたい。
- * 今後の具体的な関わり：引き続き、無理強いせず、担任との関係を大切にしていきたい。
- * 考察：B子とB保育士の距離は遠くなったが、B子がB保育士に不信感が芽生えたのではなく、B子と担任の間に信頼関係が築けたことがきっかけである。このことから、距離が遠くなることはすべて悪い事ではないと考える。

【事例3】 C保育士（6年目：2歳児担任）

【4月の関係】

C子の好きな歌を歌っている時には近くにいるが、それ以外はC保育士に近づくことはないため、その子との距離を考えてみた。

- * 具体的な関わり：C子との距離を縮めるために他の保育士の関わり方を真似してみたり、C子の好きな歌を取り入れ一緒に楽しい時間を過ごせるようにしていった。
- * 結果：C子がC保育士に何かを伝えたいときは手を引いて伝えようとしたり、C子から「〇〇しよう」と誘ってくれるようになった。
- * 今後に向けて：一対一の関わりを大切に、よりC子が、安心できるようにしていく。
- * 考察：C子が安心できる他の保育士の関わり方を見て関わり方に統一性を持った。そうすることでC子の安心感につながったのではないかと考えられる。

【2月の関係】

「一緒に遊ぼう」と誘うが断られることが多く、C子との距離は8月に調べた時よりも遠くなっているように感じる。

- * 8月に振り返った時から2月までの関わり：C子の好きな遊びを通して距離を縮めていた。C子がブロックに興味を示したので、ブロックに誘ってみたところ断られた。その後もC子の好きな遊びに誘うも「〇〇ちゃんとやる」と言われることが多くなった。
- * 今後の具体的な関わり：友だちとの関わりを見守り、

様子を見ながら子どもの遊びの世界に入っていく、一緒に楽しめるようにしていく。

- * 考察：C保育士はC子と関わりたいと思っていたが、C子にとってはC保育士ではなく、友だちと遊ぶことが楽しくなっている時期である。C保育士がC子の遊びを把握できていなかったことで、距離が遠くなってしまったのではないかと考えられる。しかし、それはC子の自主性の芽生えや友だち意識の成長が見られた。

事例4 D調理師（4年目）

【4月の関係】

D調理師が声を掛けると泣かれるため、D子との距離を考える。

- * 具体的な関わり：D子との距離を縮めるために、普段は調理業務に携わっているため、あまり関わることがなかったので食事の様子を見に行った時など、好きな食べ物を食べている時に声を掛けた。また不安そうな姿が見られた時に優しく声を掛け、少しずつ信頼関係を築けるようにしていった。
- * 結果：D子から笑顔で来てくれるようになった。
- * 今後に向けて：今までと同じように、近くなりすぎずに見守っていきたい。
- * 考察：D調理師は保育士とは違い、多くの時間をD子と過ごせるわけではないからこそ、D子に話しかけると泣かれていたのだと思う。また、D調理師もD子が好きなものを食べている時に声を掛けたことで、D子に不安な気持ちを与えなかったのではないかと考える。

【2月の関わり】

D子から声を掛けてくれることが多くなった。D子との距離は8月に調べた時よりも近くなっているように感じる。

- * 8月に振り返ったときから2月までの関わり：食事にムラのある子であったため、無理に声を掛けず食

べられた時にたくさん褒めていった。一口でも食べられたら大いに褒めた。

- * 今後の具体的な関わり：食べたくないという気持ちをしっかり受け止めていく。また以前は食べられなかったものが食べられた等、小さな成長も見逃さないようにしていく。
- * 考察：D調理師がD子の好き嫌いを把握していたことで、D子が苦手な物を食べた時に褒めることが出来ていた。また毎日、少しの時間でも様子を見ることで気付けるのだと考えられる。（写真1、2）

5 総合的な変化

A保育士

子どもの泣いている理由に寄り添い、考えることでより一人ひとりを見れるようになった。

B保育士

担任とB子の関係を大切にしているからこそ、距離が遠くなくても縮めようとせず、良い距離感を保っている。

C保育士

C子との距離が遠くなったことで、子どもの成長に気づき、一人ひとりの成長を見ていく難しさを感じる。

D調理師

毎日、給食の様子を見に行くことでD子の好き嫌いを把握しD子にとって心地よいかかわりになっている。

6 まとめ

- ・保育の距離測定で学ぶ

研究方法として、図2のと通りのオリジナル図を使用した。保育士は、すべての子どもが安心して楽しく過ごせるように丁寧に声掛けをしている。しかし、自分が声をかけると泣かれてしまう、いやな顔をされる、反対に、他の保育者なら笑顔になる、抱きついていくといった経験をした保育者は多くいるであろう。その際に、保育者



写真1



写真2

は、自分だけで課題を抱え考え込む、また考察するなど解決の糸口を探すと思われる。しかし、園内研修という場で、みんなが同じように感じていることを知ること、自分の気持ちを記録し、それを全職員に伝えることで、自分自身の保育を振り返ることができ、子どもの姿と自分の関わりを自分の中に落とし込むことができた。自分の成長したことを他職員が見て助言をしあい、良かったことは認めあう、その結果職員の次への意欲に繋がっていく。

・全職員参加、同じ空間で学ぶ、時間をかけてじっくりと学ぶ

事例にみるように、今回の研修内容は、代表参加の外部研修とは異なり、全職員参加、プロセスを重要視したものであった。そのプロセスの中で職員は、お互いの保育のことでの気づきを伝えたり、相談したり、また同僚から意見をもらい、再度考え、実践に結び付けることができた。これは、園内研修のメリットと思われる。

・学び続ける保育者、研修で育ちあう

自ら学び、考え、行動し、振り返る、そして再び学ぶというサイクルを身につけることは保育者にとって必要不可欠なことであり、実践と研修の繰り返し、保育の楽しさ・おもしろさ・やりがいを導き出すと思われる。園内研修は、年間計画をあえて時間を設定しなくとも日常保育の中で目的に応じて必要とする期間を設定することができる。(写真3)



写真3

7 結論

調査を行い具体的意見に基づき担任の保育士が改善を図ったところ、大きな効果があった。

今回の調査では、一定の期日における調査であったため、そのデータは「静止的」であったといえる。特に乳幼児にあっては、日々成長している。このため保育士との距離よりも子ども同士の距離を重視する乳児も見られるようになった。

これは保育士との距離感が「遠いから関係が悪い」と短絡的に言えないことが分かった。

距離測定には、全職員による多面的観察と、乳幼児本人の成長という側面の双方から分析する必要があることが分かった。

8 今後に向けて

園内研修の取り組みは全職員の意識の向上に繋がる。その実施のために

- 1 園内研修年間計画は前年度の年度末に職員の学びたい事を集約し、具体的に計画をたてる。
- 2 保育所保育指針の改定や保育にかかわる法律の変動があった時は計画の中に組み込む。
- 3 子どもとの距離から子どもとの信頼関係の芽生えを模索する。

参考文献

- ・保育所保育指針 平成20年3月厚生労働省 編
- ・保育所保育指針 平成30年3月厚生労働省 編

講評：園内研修からの保育者の振り返り、次へのステップ

評者：天野 珠路

コロナ禍により、外部研修が受講できない中、園内研修を充実させようと思通しを持って計画的に取り組んだ園の記録です。3歳未満児の園らしく、養護の視点を基盤に据えて一人ひとりの子どもの姿に寄り添いながら実践を重ね、その実践や子どもの成長を職員全員で振り返る様子が伝わってきます。地道な取り組みが保育内容の充実につながるということを、保育者の皆さんは実感されたのではないのでしょうか。

保育者と子どもの「距離測定」については、一つの参考として興味深いのですが、実際には「近い」「遠い」ということよりも、向き合う姿勢や客観的な観察、子どもの関係性を把握することなどが大事かと思います。しかし、今後もKJ法、ロールプレイング、記録の考察など様々な方法で保育の振り返りを行っていただくことが保育の質の向上に結び付くはずで、今後も継続して取り組んでいってください。

評者：馬場 耕一郎

一人ひとりに寄り添った保育を行うために、園内研修の充実を図られた研究です。園内研修を年間計画にそって実施している上で、保育者と子どもの距離感が図を用いて明文化し可視化されました。このように明文化することにより、子ども理解が深まると思います。保育士との適度な距離感を構築することにより、良い関係を築く手立ての一つになると思います。これからも継続して距離感を考え、子ども達と関係を向上させて欲しいと願っています。

評者：日吉 輝幸

保育者と子どもの「距離感」とは何だろうか。府中めぐみ保育園のレポートを拝見してまずはこの点が疑問に思いました。ここでいう距離感とは、保育者個人の主観的なものであり、子どもと保育者との「距離測定」にしても自己分析によるものですが、それが客観的に見て有効なものなのかどうかは、本レポートからは推察できませんでした。しかし、保育者個人の主観に基づく分析であっても、他の職員と園児に対する距離感と何故そう思ったのかという発表をし合い、他の保育者の発表を参考にしながら自身の保育の振り返りと、距離を縮める改善策を考えているところは評価できました。また、子どもと保育者との距離感が「遠いから関係が悪い」と、短絡的には言えないと結論付けていることに好感がもてました。これらのように府中めぐみ保育園では、職員研修を通して全園児の姿を全職員が共有し、担任に関わらずその園児に必要な保育を語る力を養うということは、素晴らしい取り組みであると思いますので、今後も継続して取り組まれることを期待しています。

遊戯室の利用実態 I —保育者の気づきに注目して—

石川県・大徳学園 浅香 聡彦・藤井しのぶ・安田 未有

問題提起と目的

乳幼児施設においては、保育室や園庭の環境整備についての研究や実践が進んでおり、保育の質向上に寄与している。しかしながら、遊戯室においてはその設置基準からして、曖昧な状態となっている。幼保連携型認定こども園では、保育室や園庭（運動場、屋外遊戯場）は必置となっているが、遊戯室は、特別な事情がある場合は保育室と遊戯室の兼用が可能となっており、幼稚園も同様である。一方、保育所では満2歳以上の子どもを受け入れる場合は、保育室又は遊戯室が必置となっている。

次に、乳幼児施設の遊戯室の用途や機能について明確になっておらず、研究も進んでいないという現状がある。遊戯室の利用用途は地域性や気候が大きく関係するであろう。1年中晴れていたり温暖な気候だったりして大半を室外で過ごす施設もあれば、雨の日が多く寒冷な気候によって園内で過ごすことが多い施設もあるだろう。遊戯室が一斉活動や習い事をする場所になっていたり、自由あそびが中心で常時使用していたりといった保育のスタイルによっても影響があるだろう。

この研究では、ある園において、保育者が遊戯室をどのように捉え利用しているかを明らかにすることを目的とする。

研究の方法

本研究は、A園における遊戯室に着目するため、気候やA園の構造・特徴について以下に記す。

(1) 対象園の概要

①気候

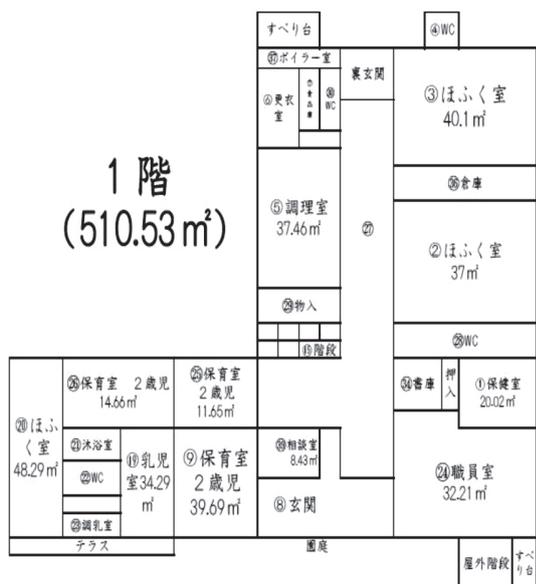
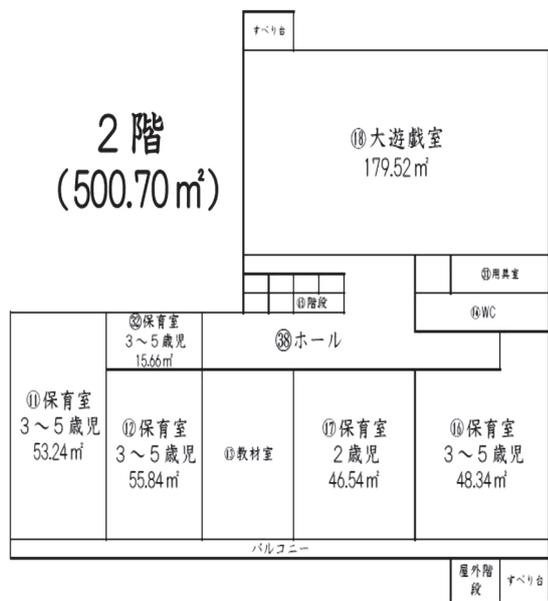
石川県の気象の特徴として、夏は湿度が高く蒸し暑く、冬は積雪の伴う寒い日が続く日本海側気候に属し、年間を通じて雨や雪が多い特徴を持っている。過去30年間（1971～2000年）の年平均気温は14.3℃、年間降水量は2,470mmで平均気温、降水量及び降雪量の経年変化をみると、平均気温は上昇傾向、降水量は減少傾向にあり、降雪量は近年大きく減少している。国内では、宮崎県・高知県に続き、石川県が第3位（2018年、気象庁）の降水量とされている。

また、夏は気温が高い日が増えてきていることから、熱中症対策として室内で過ごす時間が多くなっている。

②園の構造と人数

種別	幼保連携型認定こども園				
所在地	石川県金沢市				
運営形態	民設民営				
開設年	昭和43年				
竣工年	昭和54年				
建物構造	鉄筋コンクリート造り2階建て				
建物延床面積	1011.23㎡	建物建築面積	579.05㎡		
敷地面積	1937.18㎡	遊戯室面積	179.52㎡		
園庭面積（代替地除く。）	1150.20㎡	園庭の代替地の面積	0㎡		
区分	数量	面積（㎡）	区分	数量	面積（㎡）
乳児室	1	34.29	飲料水用設備	1	
ほふく室	3	125.39	手洗用設備	10	
保育室	5	285.62	足洗用設備	2	
遊戯室	1	179.52	調乳設備	1	
調理室	1	37.46	沐浴設備	1	
職員室※	1	32.21	非常警報設備	2	
保健室※	1	20.02	消火設備	0	
便所	4	55.58	その他		36.71
廊下・階段		204.43			
定員	155名（1号15名、2号78名、3号62名）				
受入年齢	生後2か月～就学前				
開所時間	7:00～19:00（月～金） 7:00～18:00（土）				
職員構成	園長1名、教頭1名、主幹保育教諭2名、保育教諭32名、（うち臨時・パート8名）事務員1名、保育補助者4名計41名				
クラス構成	0～2歳児は年齢別で5クラス、3～5歳児は異年齢で3クラス				
年齢別在籍児（カッコ内は年齢別定員）	0歳：10名(10名) 1歳：24名(26名) 2歳：32名(26名) 3歳：35名(31名) 4歳：35名(31名) 5歳：28名(31名) 2020年4月末現在				

③園の平面図



④保育の特徴

2歳児以上のクラスは、小雨でも合羽を着て外であそび、クラス単位で園庭園外遊戯室を使用する。また、設定保育や習い事は週に1回程度で自由あそびが中心である。春秋は毎日の日課として、全年齢で園庭園外に出る。夏冬は猛暑日や雨雪の影響があるため日課を変えて、遊戯室の使用割を作り毎日全年齢が使用できるようにしている。

(2) 調査対象者

クラス担任をしている正規保育者21名（内訳20代14名 30代 5名 40代 2名）

(3) 調査期間

2020年4月～2021年3月

(4) 分析方法

A園における全体的な計画と同様、1年を4期に分けて期ごとに特別な活動を行っていない平日のうち、晴れと雨の日の2日間の遊戯室の使用状況を写真撮影する。写真は全景と遊戯室中央から見た4分割で、時間帯は開園から閉園までとする。（I期：4～6月 II期：7～9月 III期：10～12月 IV期：1～3月）

その後職員間でラベルワークを通し、保育者の遊戯室の利用についての気づきを分析する。

〈手順〉

- ① 4期の写真を見ての気づきを、付箋1枚に1項目を書いた。その際の付箋は、ポジティブな気づきを赤色、ネガティブな気づきを青色と色分けした。
- ② 0～2歳児担任（以下、乳児クラス）2グループ、3～5歳児担任（以下、幼児クラス）2グループの計4グループ（1グループ5～6人）で、模造紙に付箋を配置し内容が類似するもの同士を集め、グループ化した。
- ③ ②の作業を繰り返し、集約して見出しをつけた。
- ④ 客観性を持たせるために、グループに入らなかった教頭が、乳児クラスと幼児クラスのラベルワークを各々統合した。その際、カテゴリーは出てきた言葉をそのまま使用もしくは意味が変わらないよう統合した。（表1、2）その後、乳児クラスと幼児クラスの違いを比較した。

(5) 倫理的配慮

A園の保育者には、園長から研究の目的、方法、個人情報保護を尊重することを口頭で説明した後、研究の同意を得た。また、個人が特定されないように配慮した。

結果と考察

乳児クラス（表1）と幼児クラス（表2）で、各々の気づきに特徴があった。また、比較することで新たな気づきがあった。以下、各々の結果と考察を述べる。

(1) 乳児クラスの気づき

乳児クラスの保育者から出た気づきとして抽出した項目は、ポジティブ125件、ネガティブ32件、全部で157件あった。【危機管理】【見通しを持って安心して過ごす大切さ】【子どもの自主性の尊重】【運動能力と共に育つ感性】【子どもの成長発達を願った環境】【4期を通しての気づき】の6つの上位カテゴリーに大別され、合わせて15の下位カテゴリーが作成された。（表1）

最も多く挙げられた上位カテゴリーは【危機管理】である。全部で47件の具体例が挙げられた【危機管理】においては、ポジティブな気づきが24件、ネガティブな気づきが23件だった。下位カテゴリー[安全]が26件に対し、[危険]が21件だった。[安全]のポジティブの具体例で一番多く挙げられたのは、『滑り台前後にクッションが

置いてあり安全である』で、次に『高さ、落ちる危険性の高い遊具の下や周囲にマットが敷かれている』であった。乳児クラスでは、特に月齢や運動発達の個人差が大きいことから、この点について多く挙げられたのではないかと考える。[危険]において多く挙げられたネガティブな具体例は『滑り台の中で子どもたちの関わりが見えづらい』、『大型遊具がたくさんあることで死角が出来る』といった保育者の目が行き届きにくい場所でのあそびについての危険である。また、『平均台のすぐ横に遊具があるのは転んだ時に危険』、『サーキットは子どもによって進みたい方向が違うのでぶつたり出会ってしまう。その際に落ちて怪我をする可能性がある』で、落下・衝突といった危険である。保育者は、子どもの成長発達に合わせ、安全性に配慮はしているが、同じ数ほどの危険が潜んでおり、安全面を最優先しているということが分かる。

次に多く挙げられたのは【見通しを持って安心して過ごす大切さ】についてであり、ポジティブな気づきが29件、ネガティブな気づきが1件、合計30件の具体例が挙げられた。下位カテゴリで最も多く挙げられたのは[午睡]についてであった。当園では遊戯室を3・4歳児の午睡スペースとして毎日使用している。多く挙げられたポジティブな気づきが『ベッドとベッドの間隔があいており、子どもが通りやすくなっており歩きやすい間隔に設定されている』であり、次に『遊具を隅に寄せることで、ベッドを敷く場所を確保してある』『いつも同じ場所にベッドを設置することで子どもは安心する』『保育者の位置から全員の子どもの午睡状況が見渡せるように配置されている』であった。普段は運動あそびに使用されることが多い遊戯室では、子どもが午睡しやすいような設定にし、安心して休息をとることができるようにといった観点から注目が高かったと推察される。一方、ネガティブな具体例として『ベッドの近くに遊具があり、気になってしまう』といった子どもの立場になって気づいた課題も出てきた。乳児クラスでは睡眠中の事故を考え、平日頃から配慮しているため、[午睡]が一番多く挙げられたと推察される。上位カテゴリの【危機管理】に属されなかったのは、幼児クラスの子どもたちにとっては、安全より安心感の方をより重視したため、【見通しを持って安心して過ごす大切さ】のカテゴリに位置付けたと考えられる。次に多く挙げられた下位カテゴリは[環境の準備]である。『子どもが自分でティッシュを使用したり、捨てたりできる位置に用意されている』、『翌日の天気や雨の予報の場合、前日に遊戯室でのあそびを用意しておき、すぐに活動できるようにしてある』などといったポジティブな具体例が挙げられ、子どもが安心して心地よく過ごせるような細やかな配慮に目が向けられているのが分かる。乳児クラスでは、子どもが保護者から離れての初めての園生活に対し、誰もが不安を持って入園してくることから、毎日安心して生活できる

ようにといったことを、保育のねらいとしているため挙げられたと推察される。次に[リラックス]という下位カテゴリでは、『端にあるベンチで休息できる』、『一番大きなマットでゴロゴロ横になり、休息できる』というポジティブな具体例が挙げられている。これは、必ずしもずっと運動をしているわけではなく、疲れた時には休息する場所も保障してあげたいという観点からの気づきである。[導線]という下位カテゴリでは、『遊具の置き方が子どものあそびの導線になっている』や、『遊具と遊具の間に適度な間隔が設けられ、子どもの導線・通り道が確保されている』といった配慮に目を向けており、これらは保育室でも普段から配慮していることであり、遊戯室のあそびでも子どものあそびのつながりや発展が重要だと保育者は認識していると考えられる。

次に多く挙げられたのは【子どもの自主性の尊重】で、ポジティブな気づきが25件、ネガティブな気づきが3件、合計28件だった。下位カテゴリの[種類]については、『遊具がカラフルで楽しい気持ちになる』『ボールの種類がたくさんある』といった17件もの具体例が挙げられた。これらは当園の遊具の種類多さ・豊富さを表しており、強みといえるだろう。しかし、強みが弱みにもなり、『たくさんの遊具を出すので準備に時間がかかる。大きくて重い遊具が多いので設定や片づけが大変』、『どのような設定をしたらよいか悩む』といった課題としても捉えられ、ネガティブな具体例として挙げられた。[フリースペース]については『かけっこを楽しむスペースが確保されている』が一番多く挙げられ、子どもが自由に走ることを大切にしており、子どもがやりたいことや鬼ごっこ・集団あそびができるスペースが確保されていることも子どもにとって重要で、【子どもの自主性の尊重】に位置付けられていると考える。[選択]がこのカテゴリに位置付けられているのは、園の保育のねらいとして、あそびは子ども自身が選択するという子どもの自主性を尊重した考えが根底にあるからだと考え。何をするかは子ども自身が決めるのであり、その選択肢を保育者が示していると認識しているからだと考え。

次に多く挙げられたのが【運動能力と共に育つ感性】で、ポジティブな気づきが26件、ネガティブな気づきが1件、合計27件だった。下位カテゴリは[楽しさ・面白さ]と[季節感]だった。[楽しさ・面白さ]については24件もの具体例が挙げられ、当園の遊戯室に多くの[楽しさ・面白さ]があると保育者が認識している。一番多く挙げられた具体例は『一つの遊具に対し、「上る」「回る」「くぐる」と様々な種類の運動ができ、バリエーションが豊富』である。その他『平均台でお店屋さんごっこができるように、ひとつの遊具でいろいろなあそびができる』といったものも挙げられており、同じ遊具でも子どもがあそびを選択したり想像力を活かしたりして、自らあそびを楽しんでいることから挙げられている。また、『たくさんの遊具があふれていると、ワクワクや期

待が高まる』というポジティブな具体例に対し、『のびと走るスペースがなくなり、程よい遊具の種類による設定の難しさを感じた』というネガティブな具体例も挙げられた。限られた場所の中では、あれもこれもできないため、保育者自らが選択しないとけない難しさを感じている。これらは、【子どもの自主性の尊重】の下位カテゴリー〔種類〕でも気づきがあったように、遊具の種類が多さ・豊富さが利点にも課題にもなっていると見える。

〔季節感〕については3件のポジティブな気づきが具体例として挙げられた。遊戯室は室内でありながら、子どもたちに季節感を感じられるような配慮も必要であると保育者は認識していることが推察される。

次に多く挙げられたのが【子どもの成長発達を願った環境】で、17件のポジティブな気づき、1件のネガティブな気づき、合計18件だった。また下位カテゴリーとして〔発達〕〔育ち〕〔人間関係〕の3項目に分別された。〔発達〕について8件のポジティブな具体例が挙げられた。一番多かったのは『発達に応じて、遊具の高さを変えられている』、『年齢に応じた設定になっているのが良い』であった。子どもの成長発達、興味関心には個人差があるため、1人ひとり個々に応じた環境設定や関わりが必要になってくる。そのため、成長発達が著しい乳児クラスの保育者は重要だと捉えていることが推察される。〔育ち〕〔人間関係〕はどちらも5件ずつ具体例が挙げられた。〔育ち〕では『いろんな形の大型ソフト積木があり、子どもの想像力が育つ』『あそびを楽しむ中で幼少期に育てたい基本動作が取り入れられている』『遊具にいろんな色があり、色彩感覚が育まれる』など、想像力・基本動作の習得・色彩感覚の育ちがあげられている。遊戯室のあそびを通して、運動能力以外のこれらの育ちも保育者は期待し、願っていると考えられる。〔人間関係〕については、『子どもたち同士で遊具の貸し借りをしている姿が見られる』『友達を楽しんでいる姿を見て「自分もやってみたい!」と刺激を受け、自分も一緒に楽しむ姿がある』などがあげられている。遊具の貸し借りや、やりとりから人間関係を学び、友達の刺激を受けて相手の様子を観察したり、真似したりして人間関係が育まると保育者は考えている。一方で、『遊具を取り合う姿が見られる』とネガティブな具体例が1件あったが、取り合うことは貸し借りにつながるやりとりの一つでもあるため、良い学びとして捉え、課題の解決へと導いていけたらと考える。

最後に、【4期を通しての気づき】についてポジティブな気づきが4件、ネガティブな気づきが3件、合計7件の具体例が挙げられた。多く挙げられたポジティブな気づきは『一見同じような環境設定に見えるが、同じ遊具でも違う使い方があったり、使用する子ども、年齢・発達が違えばあそび方も変化している』であった。それに対し、『1年を通してあそびの変化がない』というネ

ガティブな気づきがあげられ、課題が潜んでいることがうかがえた。その他にも『「押す」「引く」「くぐる」の運動を楽しめる環境が少ない』といった具体的な動きの不足についても挙げられ、これは今後の遊戯室の運動あそびの課題と考える。

(2) 幼児クラスの気づき

幼児クラスの保育者から出た気づきとして抽出した項目は、ポジティブ88件、ネガティブ35件、全部で123件あった。【保育者の思いが込められた環境】【子どもの自主性の尊重】【子どもが安心してすぐにあそびや生活を始めることが出来る準備】【4期を通しての気づき】の4つの上位カテゴリーが大別され、合わせて13の下位カテゴリーが作成された。(表2)

最も多く挙げられた上位カテゴリーは【保育者の思いが込められた環境】である。全部で65件の具体例が挙げられ、ポジティブな気づきが47件に対し、ネガティブな気づきが18件だった。下位カテゴリーは、[全体的な環境] [発達に応じた環境] [季節・行事] [人と関わることが大好きに育てほしいという保育者の思い] の4つに分けられた。[全体的な環境]のポジティブな気づきでは、『サーキットだけでなく、いろんな遊具のあそびが、繋がる環境設定になっている』が一番多く挙げられ、次に『色んな動きができるように工夫されている』が挙げられた。『いろんな遊具がたくさんある』『マンネリ化しないように考えて設定している』なども挙がっており、子どもたちのあそびが豊かで環境が整っているように見える。一方ネガティブな気づきでは、『ボール、鬼あそび、なわとびなどフリースペースが混みあうとスペースの割り振りが難しく感じる』『同じ動きが多く、幼児の運動能力で足りてない所や弱い所があるのではないか』といった例が挙げられている。これは、保育者が意図をもって環境を設定しており、遊具の数や種類が多くあり活用しているが、もっとよくなるのではないかと、よくするためにどうしたらよいか、といった保育者の課題と捉えられる。次に〔発達に応じた環境〕では、ポジティブな気づきで『子どもの育ちや年齢に合わせて高さなどの設定を変えている』が6件と一番多く挙げられている。それに対しネガティブな気づきとして、『1歳児と2歳児の設定が変わってないことがあるが、問題はなかったのか』が3件、『その年齢に合った遊具をだしているのか』が2件挙げられた。これは、ある場面によっては、設定や出ている遊具に変化が見えないことから、保育者の意図が分からなかったため疑問を呈しているのだと考える。〔季節・行事〕については、ポジティブな気づきが11件挙げられた。その中でも一番多かったのは『運動会の競技もあそびとして取り入れられるスペースがある』である。保育者は、遊戯室で運動会の競技のために、「練習」として取り組むのではなく、「あそび」の一環として行っていることが分かる。その他、季節天候といったその

時々の状況に合わせた環境が作られていることが分かる。[人と関わる]が大好きに育ってほしいという保育者の思いでは、『年齢が上がると友だちとのあそびや協力・勝負のあそびが増えている』『異年齢クラスの方では、友だちと関わってあそぶものが設定してある』『数の少ない遊具で友だちと“貸して”のやりとりがより出来る』のポジティブな気づきが挙げられた。これは友だちとの関係が深まってくる幼児クラスならではの気づきだと推察する。また保育者もそのことを意識して、遊戯室の環境を作っていることがこの具体例から分かる。

次に多く挙げられたのは【子どもの自主性の尊重】であり、ポジティブの気づきが24件、ネガティブな気づきが1件、合計25件だった。下位カテゴリーは[柔軟性][創造][意欲]の3つに分けられた。[柔軟性]では『フリースペースの広さが時期や子どものあそびによって変えてある』『広いスペースがあるからこそ、色んな動きのあそびが楽しめる』『全面に遊具ではなく、思い切り走れるスペースがある』が一番多く3件ずつあった。これは、保育者が日頃から、子どもの要求や期待に応じて、フリースペースを広げたり、その都度必要なものや環境を用意したりしているからだと推察する。[創造]では、『子どもたちが想像力豊かで見立てあそびも多い』『動かせないあそぶものと子どもたちの工夫や発想で動かしてあそべるものがある』が一番多く2件ずつ挙げられた。保育者は子どもへあそびの提供をするが、いずれ子ども自らがあそびを創り出していくことを期待していると考えられる。また、[創造]では、上位カテゴリーで唯一ネガティブな気づきが1件あった。それは、『子どもが作り出すあそびが少ない』である。遊具の数や種類がたくさんあり、それに頼りすぎるために出てきた課題だと推察される。[意欲]はポジティブの気づきが5件で、『ワクワクとあそびたくなるような設定になっている』『遊具がコーナーごとに分かれていて、子どもたちが自分であそびを選べる』などが挙げられており、子どもが[意欲]を持てるように、保育者が環境を設定していることが分かる。

次に多く挙げられたのは【子どもが安心してすぐにあそびや生活を始めることが出来る準備】で、ポジティブな気づきが14件、ネガティブな気づきが11件、合計25件だった。下位カテゴリーは、[安全性][時間][午睡][効率][整頓]の5つに分けられた。[安全性]では、『平均台の下にマットがある日とない日があるが、必要性はどうか』といった疑問に思っている具体例や、[時間]の『(遊戯室を)使っていない時間があり、もったいなく感じる』『使用時間が平等になっているのか』といった現状上手くいっていない具体例から、課題となるものが多く、また改善の余地が大きいことが分かった。

最後に【4期を通しての気づき】ではポジティブな気づきが3件、ネガティブな気づきが5件、合計8件だった。そして上位カテゴリーの中で唯一ポジティブな気づ

きより、ネガティブな気づきが上回る結果が出た。ポジティブな気づきの具体例として、『その時期の子どもの姿に合わせて準備をしているので、年度初めは高さが低めに設定されている』『数が少なく、トラブルになりやすいものは4期から設定されている』『3・4期になると、子どもの発達につれて、あそびが広がっている』の3件であった。それに対し、『同じような設定になっており、マンネリ化しているのではないか』が2件あり、続いて『1年を通しての変化はあまり見られない』『使っている遊具が一緒のため、変化が乏しいように感じる』『どんどん減っていったように思うが、1期の未満児クラスでは遊具の運動機能が果たせず、持ち歩く・裏返すといったことが多い』といったネガティブな気づきが挙げられた。保育者は、4期を通して配慮はしているが、設定や遊具のあり方について変化が乏しいのではないかと課題をもっていることが分かる。

(3) 乳児クラスと幼児クラスのカテゴリー間の比較

乳児クラスと幼児クラスの保育者の気づきのカテゴリーを比較すると、乳児クラスは上位カテゴリーが総数6項目に対し、幼児クラスは4項目であった。

乳児クラスの上位カテゴリー【子どもの成長発達を願った環境】と幼児クラスの上位カテゴリー【保育者の思いが込められた環境】はどちらも「保育者の思い・願いが込められた環境」についての項目であり、保育者が子どもに対して「思いや願い」を持って、遊戯室の環境準備を行っている。しかし、下位カテゴリーを見ても分かるように、カテゴリーの種類が似ているようで内容は若干異なる。乳児クラスの『人間関係』と幼児クラスの『人と関わる]が大好きに育ってほしいという保育者の思い』では、乳児クラスでは同じ空間で平行あそびをしながら互いに刺激を受ける関係性や、その先少し成長した姿として、「遊具の貸し借り」、「遊具の取り合い」、「遊具の使用順番を待つ」などといったやりとりの関係性について挙げられている。それに対し幼児クラスでは、「友達との協力」「勝負関係」「友達との関係性」について挙げられ、更なる人間関係の育ちを保育者が願って環境設定をしていることが分かる。このように、担当年齢によって、人間関係の育ちに保育者の気づきの違いがあった。そして、乳児クラスの下位カテゴリーには存在せず、幼児クラスの下位カテゴリーに挙げられた『全体的な環境』は上位カテゴリー【保育者の思いが込められた環境】で最も具体例が挙げられたカテゴリーで、道具の出しやすさや使いやすさ、遊ぶ際に使いやすい環境になっているか、といった子どもの立場に立っての考えや見直しに言及している。乳児クラスの保育者も子どもの成長発達や様々な力の育ちを願い、子どもの気持ちを大切にしながら環境設定をしているが、幼児クラスでは子どもの活動量が多く、また子どもの要求に合わせて、都度あそびの設定の変更をしている。そのため、保育者はスペースの

乳児クラス		幼児クラス	
上位カテゴリー	下位カテゴリー	上位カテゴリー	下位カテゴリー
子どもの成長発達を願った環境 (+17・-1)	「育ち」 「発達」 「人間関係」	保育者の思いが込められた環境 (+47・-18)	「全体的な環境」 「発達に応じた環境」 「季節・行事」 「人と関わるのが大好きに育ってほしい」という保育者の思い」
子どもの自主性の尊重 (+25・-3)	「選択」 「種類」 「フリースペース」	子どもの自主性の尊重 (+24・-1)	「柔軟性」 「創造」 「意欲」
運動能力と共に育つ感性 (+26・-1)	「楽しさ・面白さ」 「季節感」	なし	なし
見通しを持って安心して過ごす大切さ (+29・-1)	「環境の準備」 「導線」 「リラクセス」 「午睡」	子どもが安心してすぐに遊びや生活を始めることができる準備 (+14・-11)	「効率」 「安全性」 「整頓」 「時間」 「午睡」
危機管理 (+24・-23)	「安全」 「危険」	なし	なし
4期を通しての気づき (+4・-3)	「4期を通しての気づき」	4期を通しての気づき (+3・-5)	「4期を通しての気づき」

取り方や設定の仕方を、遊戯室全体のバランスを考えて行うと同時に、その難しさを感じている。

次に興味深いのは、上位カテゴリーが乳児クラス、幼児クラス共に【子どもの自主性の尊重】と同じだが、下位カテゴリー名が全く違うことである。乳児クラスは『種類』『フリースペース』『選択』に対し、幼児クラスは『柔軟性』『創造』『意欲』が挙げられた。乳児クラスでは子ども一人ひとりの興味・関心や成長段階を考慮して設定された環境設定にすることで、子ども自身が自らあそびを楽しむことができることを尊重している。それに対し、幼児クラスでは子ども自身が選択してあそべることの他にも、更に子ども自身が考え、工夫し、あそびを作り上げていく力、その力を活かして意欲的に自らあそぶ楽しさについて挙げられていることが分かる。このように子どもの年齢、成長・発達段階に伴い子ども自身が選択して自らあそびを楽しむという乳児期と、選択したあそびを更に自分の想像力やアイデアを活かし、あそびを発展させたり、新しいあそびを生み出したりしながら友達とあそびを共に楽しむという幼児期と段階を経ていることが分かる。子どもの年齢や成長発達によって挙げられる内容も変化することから、上位カテゴリーが同じにも関わらず、下位カテゴリー名が全て異なると推察される。

次に乳児クラスの上位カテゴリー【見通しを持って安心して過ごす大切さ】と幼児クラスの上位カテゴリー【子どもが安心してすぐにあそびや生活を始めることができる準備】について比較すると、どちらも「安心」という言葉が含まれている。当園では一日の生活やあそびに見通しを持って過ごすことが子どもの安心につながると思っていることからこの上位カテゴリーは似通っていると考える。しかしながら、乳児クラスでは子ども自身の安心と見通しそのものを大切にしているが、幼児クラ

スでは、子ども自身の安心と見通しのために行う大人の事前の準備や片付けについてと、大人の仕事の効率・労力について更に挙げられており、そのため上位カテゴリー一名も【子どもが安心してすぐにあそびや生活を始めることができる準備】とつけられたと推察される。

次に上位カテゴリー【危機管理】についてであるが、乳児クラスは下位カテゴリーに、「安全」「危険」で49件の具体例があったのに対し、幼児クラスは【危機管理】に類する上位カテゴリーはなかった。乳児クラスでは、日常的に転倒や落下の危険性があり、また子ども自ら危険性を指摘することはない。これに対し、幼児クラスでは、子ども自身でできることが増え、運動能力や危険回避能力が高まっていくことから、乳児クラスに比べて危険を心配することが減っていくからではないかと推察される。幼児クラスには上位カテゴリー【子どもが安心してすぐにあそびや生活を始めることができる準備】における下位カテゴリーに〔安全性〕という項目が位置付けられているが、子どもが安全にあそぶために大人の事前の準備や労力が必要であるという考えからきている。「危険」について、幼児クラスでは挙げられていないことから、やはり、乳児クラスと幼児クラスの視点に異なる特徴が見られたといえる。

同様に上位カテゴリー【運動能力と共に育つ感性】は、幼児クラスに類する上位カテゴリーはなかった。乳児期は子どもの運動能力の発達が著しく、日に日にできることが増えていく。そのため、遊戯室にしかない遊具であるそんざり、保育者の遊具の設定の仕方によって挑戦できるものや気づきが増えたりするため、特別な場になっていることが分かる。

最後に上位カテゴリー【4期を通しての気づき】においては、1年4期分の遊戯室環境設定を見て、気づきを出し振り返りをしているため、その変化についての言及

があったのだと考える。乳児クラス幼児クラス共に、上位・下位カテゴリー名は同じとなった。

総合考察

本研究では、1年を4期に分けた遊戯室の写真から保育者の気づきを、カテゴリー分けすることで、保育者が遊戯室をどう捉え、利用しているかが明かになった。

第一に、保育者は子どもへの思いや願いをもって、遊戯室の設定をし、環境づくりをしているということである。子どもにどうあそんでほしいか、必要なものは何か、子どもにどう関わろうかと、子どもの自主性を尊重しようとして保育室や園庭環境と同様に考えていた。また、遊戯室は保育室や園庭とはスペースや遊具も違うため、特別な場所として捉えていた。それゆえ、保育室や園庭と同様に設定や環境づくりについて、迷いや難しさを抱えており、危機管理や子どもの学びへの理解の必要性を感じていた。

第二に、遊戯室は体を動かしてあそぶ場だけではなく、リラックスする場もあり、また午睡という生活の場としても利用しており、多目的であった。これは、園の構造面と保育のスタイルが影響している。幼児クラスの保育室では、静的なあそびをし、そのあそびの継続を保証することにしている。午睡のスペースを取ることは保育室の面積では狭く、遊戯室を使わざるを得ない。また、全年齢で動的なあそびは保育室外で行うことになっており、園庭園外と同様に遊戯室を使っていることも理由になるだろう。

第三に、遊戯室の独自性があった。保育者は、遊戯室は動的な活動をする場合であっても、園庭とは面積や遊具が違うため、あそびの設定の仕方を変えていた。遊戯室においては、園庭の固定遊具や部屋の机や棚といった常設のものがほとんどないため、使用の自由度は高いと言える。また、保育室と兼用することやその代替として考えることもなく、特別な場として捉えていた。それも、この場ならではの安全への配慮が必要だと考えていた。

第四に、乳児クラスと幼児クラスで遊戯室の捉え方に違いがあった。やはり現在の担当年齢クラスからの視点で見ているため、例えば安全性かあそびの充実かといった重視している優先順位が違っていた。ただ、園の考え方が浸透しているせいか保育者間の考えに大きなずれはなかった。

今後の課題

今回の結果と考察から、遊戯室について客観的に捉え、改めて、その機能や用途について振り返ることができた。その存在についてはあって当たり前だと思っていたが、いかに多機能で多目的であるかが明らかになった。当園にとっては保育室や園庭と同様、不可欠な存在でまだ利用の余地は大きい。遊戯室と保育室や園庭・園周辺の環境との関係性を検討することも有効であろう。保育の質を向上させるためにも、よりよい利用方法を更に考えたい。

表1. 乳児クラスの気づき

上位カテゴリー	下位カテゴリー	具体例 (+ ポジティブな気づき)	具体例 (- ネガティブな気づき)	
危機管理 (+ 24) (- 23)	安全 (+ 24) (- 2)	巧技台下にクッションが敷いてあり安全である (2)		
		滑り台前後にクッションが置いてあり、安全である (4)		
		トランポリンの周りにクッションが敷いてあり、落ちたときに怪我しないようになっている (2)		
		非常口が確保してある (1)		
		幼児は平均台を2本くっつけ、幅を広くすることで安全が保たれている (1)	01 歳児の場合、平均台は2本のほうが良いのでないか (1)	
		太鼓橋の幅より広い範囲にマットが敷かれていて安全 (1)		
		高さ、落ちる危険性の高い遊具の下や周囲にマットが敷かれている (3)	ふかふかのマットはずれやすく、溝に落ちることもあり危険 (1)	
		遊具に滑り止めがついていて安全 (1)		
		大型ソフト積木は柔らかくて怪我しにくい (1)		
		フープは柔らかくて怪我しにくい (1)		
		年齢や個々の成長によって遊具の高さが変えられている (2)		
		保育者がどこに立っても子どもが見やすいようになっている (1)		
		全体的に低い高さになっており、安全 (1)		
		高さがあるため、自分で選んで挑戦できる (1)		
	安全面を考慮して遊具の置き方や場所を決めている (2)			
	危険 (- 21)			バランスボードは舞台の下に設定した方が安全なのは？ (1)
				平均台のすぐ横に遊具があるのは転んだ時に危険 (2)
				サーキットは子どもによって進みたい方向が違うのでばったり出会ってしまう。その際に落ちて怪我をする可能性がある (2)
				跳び箱、巧技台が両方向にあると跳んだ時にぶつかる可能性がある (1)
				走るスペースを確保しないと、遊具で遊んでいる子、走っている子でぶつかって怪我をする可能性がある。(1)
				滑り台の近くに別の遊具があり、滑ってきた子とその遊具で遊んでいる子がぶつかって怪我をする可能性がある。(1)
				滑り台の中で子どもたちの関わりが見えづらい (2)
				滑り台の大きさが子どもの死角になり、何かあった時に気が付けない (2)
				暖房の後ろが死角 (1)
				ピアノカーテンの中に子どもが隠れると見えない (1)
				大型遊具がたくさんあることで死角が出来る (2)
				とても広いので、誰がどこにいるのか把握するのが難しい。保育者間の連携が必要 (1)
			遊戯室の真ん中に遊具を多く設置すると真ん中に子どもが集まり危険 (1)	
見通しを持って安心して過ごす大切さ (+ 29) (- 1)	午睡 (+ 15) (- 1)	遊具は片づけ、必ず隅に寄せてある。(1)		
		遊具を隅に寄せることで、ベッドを敷く場所を確保してある (2)		
		すっきりした環境で眠りやすいのではないかと感じる (1)		
		ベッドの並び順はいつも同じである (子ども一人ひとりの寝る場所毎日同じ) (1)		
		いつも同じ場所にベッドを設置することで子どもは安心する (2)		
		クラスごとに午睡のエリアが区切られている (1)		
		色鮮やかな大きめの遊具は布で覆い、見えなくすることで落ち着いて眠れるようになっている (1)	ベッドの近くに遊具があり、気になってしまう (1)	
	環境の準備 (+ 7)	保育者の位置から全員の子どもの午睡状況が見渡せるように配置されている (2)		
		ベッドとベッドの間隔があいており、子どもが通りやすくなっており歩きやすい間隔に設定されている (3)		
		黒い暗幕が半分ひかれ適度に光も入るので、安心して眠れる (1)		
		子どもが自分でティッシュを使用したり、捨てたりできる位置に用意されている (1)		
		冷暖房が完備されている (1)		
		必ず換気されている (1)		
		綺麗に片づけがされている (1)		
リラックス (+ 5)	巧技台を繋げ、あそびが続くように設定されている (1)			
	遊びで遊戯室を使用するときと、生活で使用するときにメリハリがある (1)			
	翌日の天気や雨の予報の場合、前日に遊戯室でのあそびを用意しておき、すぐに活動できるようにしてある (1)			
		端にあるベンチで休息できる (2)		
		一番大きなマットでゴロゴロ横になり、休息できる (3)		

	導線 (+2)	遊具の置き方が子どもの遊びの導線になっている (1) 遊具と遊具の間に適度な間隔が設けられ、子どもの導線・通り道が確保されている (1)	
子どもの自主性の 尊重 (+25) (-3)	種類 (+14) (-3)	ボールの種類がたくさんある (まりつき・ドッジ・バスケ (大/小)・サッカー) (2)	ボール置きには2段目・3段目にボールを設置すると子どもが自分で取りやすいと思う (1)
		いろいろな柔らかさ・硬さのボールがある (1)	
		遊具がカラフルで楽しい気持ちになる (3)	
		リバーストーンの遊具は色がカラフルで、大きさもそれぞれ違って楽しめる (1)	
		サーキットに使用するバランスボードの種類が豊富 (1)	
		様々な種類の遊具があって子どもたちが自分で選ぶことが出来、遊びやすい (1)	たくさんの遊具を出すので準備に時間がかかる。大きくて重い遊具が多いので設定や片づけが大変。 (1)
		様々な大きさのフープがあり、遊びが広がります (1)	
		様々な形・色の大型ソフト積木があり、いろいろな遊び方ができる (1)	
		ジャンプ台の高さが何種類もあり、挑戦しやすい (1)	
		遊戯室全体が使われているのが良い (1)	
	様々な種類の動きができるようにあそびが用意されている (1)	どのような設定をしたらよいか悩む (1)	
	フリースペース (+8)	大きな設定の変化はなくとも、子どもたちのやりたいことを叶えられるよう、工夫されている (1)	
		マットあそびでの幅が長く取ってある (1)	
		走るスペースと他の運動遊びを楽しむスペースが分けられている (1)	
		大型ソフト積木で遊ぶ場所が確保されている (1)	
フリースペースがあることで鬼ごっこや集団遊びが出来て良い (1)			
選択 (+3)	子どもたちが自分でできることを選んで挑戦できる (1)		
	子どもが遊びを選択できる (1)		
	跳び箱など同じものでも2種類の高さを用意することで、子どもが自分で選ぶことが出来る (1)		
運動能力と共に育つ 感性 (+26) (-1)	楽しさ・面白さ (+23) (-1)	遊具を組み合わせることで、いつもと違う楽しさを味わうことができる (1)	
		平均台からサーキットへとつながる順路になっており、遊びを継続して楽しむことができる。 (1)	
		サーキットは見るだけでワクワクする (1)	
		サーキットの組み方が毎日少しずつ変化していて様々なチャレンジができる (1)	
		サーキットと他の遊具を組み合わせる考えが面白い (1)	
		サーキットがけっこう高くてスリルを味わえる (2)	
		一つの遊具に対し、「上る」「回る」「くぐる」と様々な種類の運動ができ、バリエーションが豊富 (3)	
		滑り台の中のトンネルは秘密基地のようでワクワクする (1)	
		大型ソフト積木でいろいろなものを想像し、作ることが楽しめる (1)	
		フープを並べ道のようにになっているのがおもしろい (1)	
		舞台があると、少し高い場所から周囲がよく見えてワクワクする (1)	
		巧技台が階段のようになっていて楽しそう (2)	
		正方形のジャンプマットは間隔を空けて並べてあるので、ジャンプしたくなる (1)	
	たくさん体を動かして動的遊びを楽しむことができる (1)		
	遊具に高低差をつけて楽しめるようにしている (1)		
マットの下に大型ソフト積木を入れるだけで、マットの山などができ、遊びが変わるので楽しい (1)			
平均台でお店屋さんごっこができるように、ひとつの遊具でいろいろな遊びができる (2)			
たくさんの遊具があふれていると、ワクワクや期待感が高まる。 (1)	のびのびと走るスペースがなくなり、程よい遊具の種類による設定の難しさを感じた (1)		
季節感 (+3)	玉入れを設定することで運動会への気持ちが高まる (1)		
	太陽の光が入ってくる (1)		
	遊びに季節感を感じられるように設定してある (1)		
子どもの成長発達を 願った環境 (+17) (-1)	発達 (+8)	個々の発達に合わせた遊具が設定されている (1)	
		発達に応じて、遊具の高さが変えられている (2)	
		1～4期の期にかけて子どもたちの体力やできることが増えていくことを想定した設定になっている (1)	
		年齢に応じた設定になっているのが良い (2)	
		様々な発達を促す遊具がたくさんある (1)	
	1～4期の期にかけてあまり設定に変化は見られないが、同じ遊具でも年齢が上がるにつれて、遊び方、運動が複雑になっていく (1)		
	育ち (+5)	いろんな形の大型ソフト積木があり、子どもの想像力が育つ (1)	
		様々な形がある (1)	
		遊具が揃っていることでいろんな力が育つ (1)	
		遊びを楽しむ中で幼少期に育てたい基本動作が取り入れられている (1)	
遊具にいろいろな色があり、色彩感覚が育まれる (1)			

	人間関係 (+4) (-1)	サーキットなど、下から覗くことができる遊具で友達とのやり取りを楽しんでいる(1)	
		子どもたち同士で遊具の貸し借りをしている姿が見られる(1)	遊具を取り合う姿が見られる(1)
		友達が楽しんでいる姿を見て「自分もやってみよう！」と刺激を受け、自分と一緒に楽しむ姿がある。(1)	
		順番を待つ経験をしている(1)	
4期を通しての 気づき (+4) (-3)	4期を通しての 気づき (+4) (-3)	設定の雰囲気が少しずつ変化しているように見える(1)	設定しているものにあまり変化がない(1)
		おおまかな設定は変わらずとも細かな環境を変えることで(並べ方・間隔の置き方・組み合わせ方など)子どもたちが遊びに飽きることなく楽しむことが出来ている(1)	
		一見同じような環境設定に見えるが、同じ遊具でも違う使い方があったり、使用する子ども、年齢・発達が進めば遊び方も変化している(2)	1年を通して遊びの変化がない(1)
			「押す」「引く」「くぐる」の運動を楽しめる環境が少ない(1)

表2. 幼児クラスの気づき

上位カテゴリー	下位カテゴリー	具体例 (+ ポジティブな気づき)	具体例 (- ネガティブな気づき)
保育者の思いが込められた環境 (+47) (-18)	全体的な環境 (+20) (-10)	いろいろな遊具がたくさんある(2)	ボールが棚の一番上に集中して置いてあり、子どもたちが取りにくそう(1)
		あそびだけでなく、午睡などいろんな場面で活用している(1)	ボール、鬼遊び、なわとびなどフリースペースが混みあうとスペースの割り振りが難しく感じる(1)
		サーキットだけでなく、いろいろな遊具のあそびが、繋がる環境設定になっている(4)	遊戯室にサッカーボールは必要なのか(ゴールがない)(1)
		スリルがあり、チャレンジできる環境になっている(1)	もっとフリースペースで走るスペースが欲しいと思う(1)
		フリースペースとの境目がはっきりとしている(1)	フリースペースの活用法がもっとあったらいいと感じる(1)
		舞台やピアノがあるため、歌や踊りなどの表現あそびが楽しめる(1)	フープが自由にイメージしてごっこ遊びに使える日とケンパになっている日があり、子どもは迷わないのか?(1)
		遊戯室でのあそびがお部屋のアソビからも繋がっている(1)	同じ動きが多く、幼児の運動能力で足りてない所や弱い所があるのではないか(1)
		子どもたちの様子に合わせてサーキットを組み立てているので新鮮な気持ちで楽しめる(1)	現在まりつきのボールが2個しかなく、数を少し増やしたいと思う(1)
		マンネリ化しないように考えて設定している(2)	羽子板等数に制限があるものは、取り合いになっていた(1)
		色んな動きができるように工夫されている(3)	物を子どもが移動させたりすると特に子どもたちのあそびの動線がどうしても交わりやすい(1)
	設定する人の思いやねらいがそれぞれに感じられる(1)		
	舞台も使い、遊戯室全体を使って広くあそべるようになっていく(1)		
	様々な形や凸凹があるバランスボードをサーキットに利用することでたくさん感覚が楽しめる(1)		
	発達に応じた環境 (+13) (-8)	年齢に応じた遊具が設定されている(2)	その年齢に合った遊具をだしているのか(2)
		01歳児と2歳児で設定が大きく変わっている(1)	1歳児と2歳児の設定が変わってないことがあるが問題はなかったのか(3)
		子どもの育ちや年齢に合わせて高さなどの設定を変えている(6)	幼児の運動遊びや運動能力について、まだまだ勉強不足だと感じる(1)
		0歳児がいる時には、低めの高さの設定になっている(2)	ロディが345歳児の時に設定されていないのはなぜ?体重制限があるのか?しかし土曜日は使っている(1)
		年齢が上がるとにつれてダイナミックにあそべるようになってきている(1)	跳び箱をもっと挑戦していけるように、7段もあつたらいいのかなと思う(1)
	季節・行事 (+11)	羽根つきやコマ回しなど季節ならではのあそびがある(2)	
		運動会の競技もあそびとして取り入れられるスペースがある(4)	
行事や時期に合った玩具が準備されている(1)			
雨の日は遊戯室での、全年齢の運動遊びが保障されている(1)			
暑すぎる日や気温の低い日は遊戯室での子どもの運動あそびが保障されている(1)			
夏祭り・運動会・発表会など楽しんだり、練習したりするスペースもある(2)			
人と関わることが好きに育ってほしいという保育者の思い(+3)	年齢が上がると友だちとのあそびや協力・勝負のあそびが増えている(1)		
	異年齢クラスの方では、友だちと関わってあそぶものが設定してある(1)		
	数の少ない遊具で友だちと"貸して"のやりとりがより出来る(1)		
子どもの自主性の尊重 (+24) (-1)	柔軟性 (+11)	フリースペースの広さが時期や子どもの遊びによって変えてある(3)	
		成長に伴い、走るスペースが増えている(1)	
		広いスペースがあるからこそ、色んな動きのあそびが楽しめる(3)	
		全面に遊具ではなく、思い切り走れるスペースがある(3)	
		ゆったりできる場所もあり、その日の気分が乗らなくても同じ空間で過ごせる(1)	
	創造 (+8) (-1)	色々な遊具の使い方を認めている(1)	
		子どもたちが想像力豊かで見立てあそびも多い(2)	
		成長するにつれて、あそびが豊かになってきている(1)	
		1つの遊具でも様々な楽しみ方がある(1)	
		その時期によって使い方やあそび方が変わっている(1)	
動かさないで遊ぶものと子どもたちの工夫や発想で動かしてあそべるものがある(2)	子どもが作り出すあそびが少ない(1)		

	意欲 (+5)	ワクワクとあそびたくなるような設定になっている (1)	
		遊具がコーナーごとに分かれていて、子どもたちが自分であそびを選ぶ (1)	
		色の種類がたくさんある玩具は、きれいに並べられていて、見た目も楽しく感じる (1)	
		いつも同じ遊具があるので、こどもたちが見通しを持ってあそぶことが出来る (1)	
		だいたいどこに何が置かれているのか把握しやすいのでやりたいことをすぐに見つけて遊びだすことが出来る (1)	
子どもが安心して すぐに遊びや生活を始めることが出来る準備 (+14) (-11)	安全性 (+3) (-3)	小さな段差や高さのある所にはマットが敷かれており、安全面の配慮をしている (1)	コアラの滑り台が中心にあると死角が増える (1)
		太鼓橋の下にマットが3枚も敷いてあり、ぶら下がって転倒した時のために工夫されている (1)	入り口付近に跳び箱を跳んだあとのマットがかぶっており、危険に感じる (1)
		サーキットの下にマットがあり、安全面が考えられている (1)	平均台の下にマットがある日とない日があるが、必要性はどうか (1)
	時間 (+2) (-4)	あそぶ時間と午睡の時間と遊戯室の使い分けが出来ている (1)	使っていない時間があり、もったいなく感じる (1)
		乳児クラスの使用が多い (1)	遊戯室で遊ぶ時間が短い (1)
			使用時間が平等になっているのか (2)
	午睡 (+3) (-2)	自分のベッドまでの道がきちんと確保されている (1)	午睡時、入口がフリーだと、走って入りたくなる (1)
		ベッドが奥にあり、こじんまりとした印象になり、良いと感じる (1)	青マットが舞台上に片付けていると、午睡時に目立っているように感じる (1)
		午睡時に仕切りがあることで、広いスペースも落ち着ける空間になっているように思う (1)	
	効率 (+3) (-1)	天気予報の情報を上手く利用して、前日の設定を翌日に残しておくのは手間を省く良い工夫だと思う (1)	雨の日は昼寝時に、片付けをしなければならない (1)
		綺麗な状態で次の日まで残してある (2)	
	整頓 (+3) (-1)	色があるものは色ごとに片付けがしており、色の識別も出来る (1)	大型積み木の片付け方について、色ごとになっているが色の順番は決まっていない(1)
		とてもきれいに遊具が片づけられている (1)	
		同じ場所に片付けられているので、すぐに使いだせる (1)	
	4期を通しての気づき (+3) (-5)	4期を通しての気づき (+3) (-5)	その時期の子どもの姿に合わせて準備をしているので、年度初めは高さが低めに設定されている (1)
数が少なく、トラブルになりやすいものは4期から設定されている (ロディやカート等) (1)			1年を通しての変化はあまり見られない(1)
3・4期になると子どもの発達につれて、あそびが広がっている (1)			使っている遊具が一緒のため、変化が乏しいように感じる (1)
		どんどん減っていったように思うが、1期の未満児クラスでは遊具の運動機能が果たせず、持ち歩く・裏返すといったことが多い (1)	

評者：天野 珠路

園庭や保育室の環境ではなく、遊戯室の環境に注目したことは新しい着眼点であり、評価できます。各園で遊戯室の広さや活用状況は異なると思われ、利用時間や活用内容等の調査をしていただきたいと思うところです。特に、遊戯室の環境構成やそこで繰り広げられる遊びや活動の種類や内容について調査・研究していただきたいと思いました。

本作品では、かなり広い面積を占める遊戯室での乳児クラス、幼児クラスの保育の様子を記し、計画と照らし合わせながら保育を見直し、考察を深めています。こうした取り組みはとても貴重ですが、さらに上記の視点を持って、遊戯室の意義や子どもの成長につながる有効な活用法を検証していただくことを願います。

評者：石川 昭義

乳幼児施設の遊戯室の用途や機能についての研究が進んでいないという認識のもと、遊戯室の利用実態を明確にし、遊戯室の機能や活用方法を考察するという挑戦的な報告となりました。研究の方法として、1年を4期に分けた遊戯室の写真をもとに、乳児クラスと幼児クラスのそれぞれの保育者からポジティブな記述とネガティブな記述を集約する手法をとり、保育者が遊戯室をどのように捉え、どのように利用しているかを明らかにしました。

保育者の考察を通して、改めて遊戯室が多機能で多目的であることが明らかにできましたが、興味深かったのは、遊戯室が体を動かして遊ぶ場だけでなく、リラックスする場だという発見です。

ただ、遊戯室自体の機能の分析なのか、遊具の

活用の分析なのかが曖昧になっていたように思います。今後の研究としては、実際の利用時間を客観的に計測する方法への発展が期待されます。また、年齢や季節による違い、あるいは経年による違いを明らかにすることで、保育内容の変化を把握する手立てとなると考えられます。総合考察で捉えられたように、遊戯室が多機能で多目的であることについて、他園との違いがあるのかどうか、保育室での環境構成との質的な違いはどこにあるのかに着眼して研究が進むことが期待されます。

評者：高木 早智子

文章の構成もしっかりしており、報告書としての体裁も整っています。また、乳児クラス・幼児クラスに分けた気づきの表も興味深く、発達過程に沿った具体例が挙げられていると感じられました。「遊戯室」に着目した点もユニークですが、惜しむらくは問題提起が弱いように思いました。「保育者が遊戯室をどのように捉え利用しているかを明らかにすること」で何を研究しようとしたのか、そこにどんな目的があったのか、報告書内に具体的な記載があるとよかったです。実践研究の題名（「Ⅰ」）からも、この研究には続きがあることが推察されます。「今後の課題」のところ、そのことについて触れられていなかったため、ぜひ今回の調査の結果をどのように貴園の保育者にフィードバックを行い、今後の保育実践に活かされていくのか。そして「遊戯室の利用実態Ⅱ」でどのような保育実践研究として発表されるのか、次の報告をご期待申し上げます。

五感を刺激する関わり

愛知県・光徳保育園 青野 ちひろ

私はこれまで私自身が保育していくうえで、大切にしているものがあつた。それは、子どもたちが五感をフルに使って感じられるような関わりや、環境、経験できる場を提供することである。五感を刺激できる経験は子どもの「感じる」ことが、より記憶に残ったり、これからの人生の糧になったりすると思っていたからだ。私自身幼いときに経験したことが大人になったときに活かされた経験があり、五感で感じることの素晴らしさを体感してほしいと思っていた。私たちが生きる現代社会においては、私自身、人と人が直接やりとりするというより、電子機器などネット上でのやりとりが増加し人間関係の希薄さを感じる。そして、地球の温暖化の影響からか、季節の変化が急速で四季折々の季節の移ろいを感じるものが少なくなったり、技術の発展から陳列する野菜や果物は通年変わらず流通しており、食べたい食材がいつでも手軽に、手に入るようになり、季節ごとに変化することが減少したりしたように思った。また、触れるものは人工的な工業製品がほとんどで、五感で感じる機会が少しずつ失われているのではないかと感じるようになった。

そこで私は、五感について今一度学び直し、五感が与える影響を考えることにした。ゲーテ学者であり、人間学の創始者のルドルフ・シュタイナーは「人間は常に『感覚・印象・認識』という三重の仕方世界で世界の事物と結びついている、その三者がバラバラではなく、互に関わり合いながら一人の人間として成長をしていく」と言っている。赤ちゃんは「タッチング」や「スキンシップ」など直接肌に触れられることで、愛情を確認し、自分が守られていると実感するそうである。この実感が赤ちゃんの人生を愛と信頼の体験でスタートさせ、より幸福な一生を過ごす条件づけとなる。この「感覚」の情報で脳のシナプスが増加していく。シナプスの数は、シカゴ大学のピーター・R・ハッテンロッカー教授の研究からシナプスの増加は5歳がピークと言われている。これを見ても乳幼児期に遊びを通して五感の嗅覚、聴覚、視覚、味覚、触覚で「感覚」を磨き、感覚の情報を刺激することが大切だということである。遊びを通して五感で感覚を磨き、五感で感じることで「感性」が磨かれるということである。五感を刺激することは脳の活性化に繋がり、さまざまな力が伸びることを学んだ。

この実践は0～1歳児の保育を通して、五感を刺激できるような環境作りや遊びを提供していき、保育士の関わり方で子どもの反応がどのように変化するかを研究

し検証することにした。

実践

事例：布（0歳児時期）4月～7月 写真1

ポーチから布が数珠つなぎで出てくる玩具を2種類の布で用意した。レースとオーガンジーのもので蓋を開けて引っ張ると布が出てくる玩具である。保育士が蓋を開けてあげるとA児は喜んで引っ張り始めていた。その様子を見ていた他児が真似をして引っ張り出すようになった。始めは布を引っ張り出すことに夢中で繰り返し遊んでいた。次第に布の柔らかい感触を好み、触れたり頭に乘せてみたりするようになった。布の感触に慣れたところに保育士が自分の顔にかけて「いないいないばあ」をして子どもと遊んでいた所、A児も自分で顔にかけて保育士の真似をしていた。さまざまな色の布を顔にかけて布から透けて見える世界や色の違いも楽しんでいるようだった。

写真1



事例：マラカス（0歳児時期）4月～3月

小さなペットボトルの容器にビーズや鈴、ボンボンなどを入れて音が鳴る玩具を用意した。保育士が腹ばいをしているB児にマラカスを振って音を鳴らすとビーズや鈴がぶつかり合うのを聞いたり、マラカスを目で追ったりしていた。成長し座れるようになり、自分でマラカスの容器をつかめるようになるとマラカスを振って音を鳴らしていた。中身によって音や色が違うものを準備するとA児は自分のお気に入りができ、愛用する姿も後半期には見られた。日常のやりとりのなかで保育士が子どもに「どうぞ」と渡しているのを見ているうちに言葉はないが、A児は友だちや保育士へ貸してあげる姿も見られるようになった。3月の頃は音楽が流れるとマラカスが

入っているかごから出してクラス全員で音楽に合わせてマラカスを振って鳴らして、楽しさを友だちや保育士と共感し合っていた。

事例：スポンジ（0歳児時期）7月～8月 写真2

7月に室内でスポンジのみの感触に触れて遊んでいたものに絵の具で色をつけた色水を浸した。初めはスポンジの入った、たらいには触れようとしなかった。保育士がたらいに手を入れて「ムニュムニュするよ。気持ちいいよ」と言いながらスポンジに触れて見せるとチラチラとこちらを見て、気になっているようだった。保育士が色水に浸ったスポンジを握って絞ってみせるとB児は、上からスポンジを押し始めた。保育士が色水を含んだスポンジを持ち、水が滴ってくるさまを見せながら「お水がジャーって出てきたね。」と少し驚いた表情で伝えると子どもも興味を持ち始めた。子どもが持ち上げるのは重たいと思ったため、持たせてあげた。するとB児も、保育士と同じようにスポンジを握り色水が滴ってくるのを見て歓声を上げていた。繰り返しスポンジを握り水が出てくる様子を楽しんでいた。

写真2



事例：ジェルマット（0歳児時期）7月～9月

ジェルマットの中にそれぞれ玩具を入れたりビーズを入れたりした3種類のものを用意した。子どもの前にジェルマットを置くと触れずに見ていた。保育士が触れてみせ「ぐにゅぐにゅするよ。ヒンヤリして冷たいよ。ほら、キラキラしたものが入っているよ。」などと触れて見せ言葉を掛けていった。数日経過するとC児が、ジェルの中に入っている玩具に興味を持ち、指で押し始めた。指で押すことで袋の中の玩具やジェルが動くことに気づき、何度も手や指先で触れていた。C児は次第にジェルが冷たいと感じたのか、自分で持ち上げて顔に乗せていた。保育士もC児を真似て顔に乗せ「冷たいね。気持ちいいね。」とジェルの冷たさや気持ちよさを言葉で表現していった。保育士が手で上から押して「ぐにゅぐにゅって動くね。」とジェルが動く様子を見せると足に乗せたり、踏んでみたりして感触を味わっていた。

事例：風船マット（0歳児時期）7月～9月 写真3

膨らませた風船を圧縮袋に入れて圧縮袋の空気を抜き、マットを作成した。色彩豊かになるように色々な色の風船を入れていった。導入したときは警戒してマットに乗らずに、風船に触れたり叩いたりしてボンボンと弾むこ

とを楽しんでいた。保育士が風船マットの上に乗ってC児をマットへ「おいで」と誘うと、興味を持って寄ってきた。自分の力でA児は保育士にマットの上に乗せてもらって、アンバランスさを楽しんだりしていた。何度か経験すると座面が不安定で身体のバランスを取りにくいようのでA児はマットに乗ることを嫌がっていた。A児はマットの外から風船マットに触れたり、マットを持ち上げてみたりしていた。何度か遊んでいくとA児も保育士が乗っていると安心して寄ってきて一緒に乗ったり、マットの上をハイハイしたりしていた。

写真3



事例：広告で作成した本（0歳児時期）9月～3月

B児が絵本を破っているのを見て、広告を冊子にして、子どもが持ちやすい絵本サイズにカットし、ホチキスで止めたものを提供した。子どもたちに出したばかりの頃は、ペラペラとページをめくっていた。B児は広告が破れると、にやりとほほ笑んでいた。破ったときの音や、紙が破れたのを見て繰り返し破っていた。「ビリッ」という紙の破れた音を聞いて他児も気づき、B児と同じように破ろうと、紙を持ちながら横に引っ張る様子が見られた。保育士が紙の端を破り、破りやすいようにしてあげるとC児は自分で破ることができ、破れた音や感触などで声を出して笑っていた。後半期にはA児、C児は指先を使って細かく破ったり、細かくなった紙をつまんで、拾い集めたりする姿へ変化していった。

0歳児の終わりの頃には、A児が保育士に、「さっぷいね（寒いね）」と肌で感じたことを言葉での表現をしようとしていた。日が当たり気温が上昇すると「あったいね（暖かいね）」と体感し、気温差を言葉で表現していた。月齢が3、4か月遅い子は言葉が出なかったのに、言葉で表現することはなかったが言葉の意味を理解していて、うなずいていた。

B児は、風が吹くと敏感に反応し、「びゅーん」と言葉で表現することが見られるようになった。食事のときは、食感が固いもの（例えばフライ、餃子、春巻きなど油で揚げたものやかりんとう、せんべいなど）を口に入れたときに保育士が「ガリガリ音がするね」と声を掛けると、C児も一緒に食べ「ガ」と保育士と同じように発音したり、うなずいたり、口元を指差ししていた。噛んだ時に音がなると、B児は保育士の顔を見て「音がしたよ」というように目で訴えていた。保育士は視線を合わ

せ「パリパリって言ったね。美味しそうな音がしたね。」と言葉で答えると、一口噛むごとに「あ、あ」と口の中を見せて指差しや「ぱっぱり」と発語していた。音が鳴る度に保育士と共感したく、繰り返し訴えるようになった。

戸外から聞こえる“音”にも敏感になってきた。工事の音を聞くと怖がって保育士のところに駆け寄ってきて抱き着くが、音がする工事の様子は気になり、保育士と観察することもあった。パトカーのサイレン音やバイクのエンジン音、ヘリコプターの音が聞こえると「ピーポー、ピーポー」や「ぶーんきた」と敏感に反応するようになった。

1歳児に進級し、新入園児10名が加わった。新入園児は新しい環境ということもあり、保育士とのやりとりによりあまり反応は見られなかった。保育士が「お日様が眩しいね」と言いながら、太陽を見上げると新入園児は、太陽の日差しを感じ、保育士と同じ方向を見て眩しそうに目を細めて空を見上げていた。

新入園児は食事の時間を喜んでいる。「まんま来たよ。美味しそうな匂いがするね」と配膳している方を指差ししながら話し掛けると、ハイハイをして配膳している方へ近寄ってきて、ご飯の香りや食器の音などを感じていた。

進級した6名が、0歳児の終わりに、頻繁に反応していたパトカーのサイレン音や風の刺激などに、新入園児はあまり反応を示さなかった。進級した子たちは、春の風が吹くたびに「びゅーん」と言ったり、保育士も子どもを真似て、風が吹くたびに風が身体に当たる心地よさを、言葉と表情で伝えていくと、共感したりしているようだった。同じように新入園児にも関っていくと風が吹くたびに、吹いてくる方向を見て体感していた。

事例：ウインドチャイム（1歳児時期）4月

風がよく吹き込んでくる窓辺にウインドチャイムを下げた。保育士が、音が鳴る度に「リンリンって鳴ったね。いい音したね。」と敏感に反応し、話し掛けていった。C児は音が鳴ると、鳴った方を指差しして「リンリンった。（リンリンって鳴った）」と保育士に言うようになった。保育士が耳に手を置き、ウインドチャイムの音を聞く仕草をして反応してみせた。次第に、新入園児も音が鳴ると「リンリン」と言ったり、ウインドチャイムに近寄り、手を耳に置いた仕草をしたりするようになった。新入園児は音に反応して泣き止み、音が鳴る方向に顔を向けて関心を持っていた。

事例：花紙（1歳児時期）6月 写真4

保育士が花紙を一枚ずつ渡しながら「柔らかいね。ヒラヒラしてるよ。」と言った。A児は保育士が言った言葉を繰り返し、「ヒラヒラ」と言いながら持っていた。保育士が立ちあがり、頭上で手を離し手で仰ぎ、風に乗

せたり、扇風機の風を利用したりして揺らめくようにした。また、「飛んでみたい」と言いながらゆっくり地面へ降りていくのをA児と観察した。「ちょうちよみたかったね」と言い、ちょうちよの歌を唄いながら再度同じことをした。A児も「ちょうちよ」と言いながら、保育士と同じようにやろうとした。うまくできず紙をちぎることもあったが、保育士が歌っていると語尾や所々一緒に歌いながら真似て、頭上から花紙を離していた。

写真4



事例：新聞紙（1歳児時期）6月 写真5

B児は保育士から新聞紙を受け取ると自分で裂いて、紙が破れる感触や破れている時の音を聞いたりして笑顔で楽しんでた。B児の様子を見て、新入園児も床にあった新聞紙を持ち、B児の真似をして紙を破り始めた。「破っているんだね。ビリビリっていうね。」と話し掛けながら、一緒に新聞紙を破ると新入園児は無言で保育士の方を見て破った。細くなった新聞紙を雪のように降らせると、上から新聞紙が舞い降りるのを見上げていた。B児は、舞い降りる新聞紙を見て、保育士を真似て細くなった新聞紙を上に向けて、舞い降りてくるのを繰り返ししていた。保育士が細くなった新聞紙を体にかけて「気持ちいいよ。」と床に寝そべるとB児は「あっあっ」と身体にかけてほしいと仕草で伝えてきた。保育士と同じようにしてあげると気持ちよさを感じて笑って喜んでた。

写真5



事例：ジェルマット（1歳児時期）7月～8月 写真6

ジェルマットに絵の具で赤・黄・青・緑で着色した。昨年度にジェルマットを経験していた子は経験したことを覚えていた。C児は出してすぐ触れて「冷たい、気持ちいい。」と言いながら足で踏み始めた。A児は手で押して感触を味わったり、直接持って、自分の顔をつけたりと昨年と同様の姿が現れていた。保育士もジェルマットに触れ、「冷たくて気持ちいいね。ぐにゅぐにゅ動い

て面白いね」と共感して言うと、C児が「ぐにゅぐにゅ」と保育士の発した言葉を何度も真似た。ジェルマットの上に寝そべり、全身でジェルマットの感触を味わうようになった。新入園児は少し離れたところから遊ぶ様子を見て、触るのをためらっているようだった。積極的に触れるC児やA児を見て、興味を持ち、少しずつ手で触れ始めた。言葉にはならなかったが、C児とA児の気持ちに共感したよう手でジェルを押し始めた。次第に同じように「ぐにゅぐにゅ」と言いながら足で踏んで感触を味わうように変化していった。

写真6



結果

0歳児のころの子どもの反応を見ると、元々その子が持っている気質（性格）も影響していると思うが、全体を通して初めて見ることや、初めて経験するものに対して興味を持って観察している。大人が触れているところを観察して子ども自身も五感をフルに使って体感していた。大人が五感を使って表現する表情や言葉や言葉のトーンも関係すると感じた。さまざまな経験を積み重ねた結果、0歳児の終わりには日々の事象にも敏感に反応するようになったり、子ども自ら、さまざまなことと触れ合おうとしたりしていた。1歳児に進級し、保育士と新しい感触や音に積極的に関わるようになった。また、感じたことを、より大胆に表情や言葉で表現するようになっていった。初めは、大人が擬音語で表現したことをそのままオウム返ししていたが、実体験したことで、絵本の中の表現が重なり、体験したときに子ども自身から表

現することも見られるようになってきた。新入園児は、周囲の反応を確認してから体験することが多く見られた。積極的に触れる子どもの姿や大人の姿に刺激され、少しずつ自ら体験していった。どの子どももさまざまなものに触れることで、自分の好みのものとそうでないものもあることに気づいていた。

考察

今回「子どもの五感を刺激する環境」を研究し感じたことは、五感を使った体験には人や物という存在が必要不可欠である。私たち保育士（大人）は、子どもが感じたであろうことを丁寧にキャッチし、柔軟に五感を刺激できるような関わりをすることができるかだと感じた。私たち大人が、五感を意識して子どもに投げかけることで日常の何気ない事象にも気づき、より子どもの経験が増していくと思った。私たちが生きていくということは、人や物と出会い、それを「五感」という感覚で感じ、五感で感じ取った事柄に肯定的や否定的な印象の「感情」が生まれて気持ちが動かされ、「思考」によって事物の本質や法則を認識するそうだと感じた。その経験を重ねていくことでアイディアがひらめいたり、危険を回避したり、相手を思う気持ちが育ち生きる力が育っていくと感じた。

子どもたち一人ひとりにはたくさんの可能性を持っている。子どもたちが自由に表現し、活動が豊かになる環境が求められている。私たち保育士（大人）は自分なりに魅力ある人格を磨くことが必要であると共に「感性」のバリエーションを膨らませることも大切だと感じた。

参考文献

「感じる」を育てる本

レイチェル・イザドラ著 ディスカヴァー編集部(訳)
山口創(監修)

五感の力 未来への扉を開く

グラバア俊子著

講評：五感を刺激する関わり

評者：天野 珠路

神経系の発達が目覚ましい乳児期を中心に、子どもの「五感」を刺激する遊びや環境を考え、具体的な実践につなげていった保育記録です。様々な素材や感触の遊具やものを用意し、子どもたちの様子を観察したことで、乳児保育の充実が図られたことが伝わります。

一方、子どもに「与え」、五感を刺激した様子はよくわかりますが、さらに子ども自らがすすんで手にしたり、おもしろがって繰り返し試したり、喜んで遊ぶ様子など、子どもが主体的に環境に関わる様子をもっと知りたいと思いました。感覚の発達はその後の認識力、思考力の発達を促します。より子ども自身が選んだり、試したりする機会を0歳から意識して作っていくとよいでしょう。今後に生かしてください。

評者：田和 由里子

0、1歳児の保育で五感を刺激できる環境や遊びを提供し保育者のかかわり方で子どもたちがどのように変化をしたかの実践でした。身近にある「布」「広告」「新聞紙」「マラカス」「スポンジ」また手作りの「ジェルマット」「風船マット」などを用意して経験したり保育者が関わって遊びを発展させている様子が詳しく書かれていました。0歳児と1歳児は、発達段階にも差があるのでそれぞれのまとめがあるとわかりやすかったと思います。他の年齢での実践も行ってみるのもよいのではないのでしょうか。

評者：日吉 輝幸

ヒトがもつ「五感」は、ヒトが生物として生きていくために必要不可欠なものであることは言うまでもありません。本実践は、0歳児から1歳児の保育をとおして、五感を刺激できる環境や遊びを提供しつつ、保育者の関わりによって子どもの反応がどのように変化するのかを研究し検証したものでした。

レポートとしては、「五感を刺激する環境」について論じられていますが、五感のうち「味覚」についての記述が欠けているようで残念でした。また、列記されている事例自体を五つの感覚に分けた方が、より分かりやすかったかもしれません。更には、五感を刺激する働きかけに対する園児の様子は、もう少し詳細に記述されて、園児の変化や成長の様子が分かりやすくされた方が良いと思いました。なお、考察においては、たくさんの可能性をもっている子どもに関わる、保育者自身が人格を磨き、豊かな感性をもつことが大切と結論付けていることは、大変素晴らしいことだと思いました。今後は、0歳児から1歳児のみならず、他の年齢の子どもたちへの関わりも研究していただき、再度報告いただくことを期待しています。

「思いやりの心」を育む活動こそ 「道德教育」に繋がることを発見した

沖縄県・愛心こども園 儀間千夏 眞喜屋亜沙子

1. はじめに

当愛心こども園は、子ども達の「思いやりの心」を育むための保育を理念に掲げ取り組んで12年になる。毎日、各クラスは子どもたちの「思いやり見つけた」というタイトルで、その日に見つけた思いやりをカードに記入し、そのカードを玄関先の「思いやりボード」に掲示して、毎日送迎時に見て頂く。思いやりボードの目的は、ボードに掲示している思いやりカードを読むことで親子の楽しい会話に繋げることができる。

又、ご家庭で見つけた思いやりについても、園で用意してあるカードに記入して園に提出して頂き、ご家庭での思いやりも玄関先のボードに掲示している。更に保護者同士も、我が子の「思いやり」を見つけ、報告し合っている姿がなんとも微笑ましい光景だ。

これはまさに、ご家庭とこども園の心を結ぶ「道德教育そのもの」だと実感している。「思いやりの心を育む道德教育」は、思いやり3原則の「手伝う行動・励ますことば・ありがとうの感謝の心」を保育理念とし、12年間実践し続けている。

園が保護者や地域の中核となって果たす役割は、本当に大きいことを日々実感している。又、園生活では友だちを大切にすること、励まし合うことの尊さをしっかりと子ども達を通して保護者にも伝えていかななくてはならない。世の中で起きている心の痛む昨今の事件を思う時、

「思いやりの心」をみんなが共有する社会づくりの大切さを痛感している。

今、私たちに求められていることは、子ども達や保護者、地域の人々に「思いやりの心」を実践し、発信していくことだということを実感しつつ、この12年間の歩みに至った。

愛心こども園は「子ども達に思いやりの心を育む」この一念で、保護者と心を合わせて取り組んできた中で、12年の歩みを保護者アンケートを通して、園活動の全体像としてまとめてみた。

そして、98%の保護者の皆様から「思いやり保育について良い取り組みだと思う」という高い評価を頂いたことで、「思いやり保育は、幼児期の道德教育」に繋がることを改めて確信を持つことができた。

今回の報告は、活動全体の中から、玉重福祉会で制作した「思いやりかるた」の活動に絞り、その現状と効果について報告する。

2. 園の概要

設置主体：社会福祉法人 玉重福祉会

園名：愛心こども園

所在地：沖縄県那覇市字上間384-15

園児数：定員（145名） 現員（133名）

年齢	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	園児数
定員	9名	18名	24名	32名	31名	31名	145名
現員	9名	18名	24名	30名	31名	21名	133名

職員構成：理事長、園長、事務職員、主幹保育教諭、副主幹保育教諭、保育教諭（保育士、パート含む）、管理栄養士、調理員

3. 活動のねらい

- ・思いやりかるた遊びを通して、子ども達が文字や言葉、表現等に興味を持つ。
- ・思いやりかるたを通して、思いやりの意識を高めていく。
- ・思いやりかるたを通して、友だちとの関わりを楽しむ。
- ・思いやりかるたを通して、和やかなご家庭での親子の絆を深める。

4. 実践方法

- ・思いやりかるたを通して各クラスでの取り組みと異年齢児との関わりを下記のように比較してみた。

5. 実践

* 思いやりかたの取り組み

<p>苺組（0歳児） 実践方法</p>	<p>子どもの姿</p>	<p>保育教諭の関わり</p>
<ul style="list-style-type: none"> 他のクラスに貼ってある拡大コピーしたかるたを見せた。 自分のクラスの壁の手の届く位置に拡大コピーしたかるたを貼り触れられるようにした。 活動時間に拡大コピーしたかるたを床に並べて置いた。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもは興味を示してかるたに触れたり、指差しして喜ぶ姿が見られた。 壁に貼ってある絵カードに気づき初めは手で触ろうとしたり、指差しをしたりと楽しむ姿が見られたが、すぐに興味を無くした。 再び興味を示し、笑顔で触れる姿が見られたが、興味がある子とない子の差がある。 かるたを嬉しそうに手に取り絵を見たり、保育教諭に手渡している。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもが興味を示すようなかるたに合った言葉かけをしたり歌をうたったりした。 「見て見てケーキだね」「おいしそうだね」など絵を見ながら話しかけたりすることもした。 興味が持てるように手で取りやすいようにかるたを床に置いてみた。 絵を指差しして、話しかけたり読み札を読んだり興味を引くような関わりをもち、かるたを口に入れてしまわないよう気をつけた。
<p>桜組（1歳児） 実践方法</p>	<p>子どもの姿</p>	<p>保育教諭の関わり</p>
<ul style="list-style-type: none"> かるたをフラッシュカードのように見せながら楽しんだり親ませるようにした。 かるたを拡大コピーして壁に貼る。 	<ul style="list-style-type: none"> 興味を示して絵札カードを見入っている。 絵札を指差ししたり、保育教諭の真似をして語尾を発している。 かるたの絵を見て指差しして反応している。 保育教諭の真似をして「どうぞ」又は「ありがとう」のやりとりをする姿が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> かるたの読み札を読み話をしたり絵札を見ながら興味が持てるような声かけをする。 絵札の意味を簡単に話したり実際にその風景をやってみたりする。 お友だちにキャンディーを上げている絵札を見せながら、「お友だちにどうぞと言っているね」「どうぞと言われたらありがとう」とやりとりを知らせたりする。
<p>菊組（2歳児） 実践方法</p>	<p>子どもの姿</p>	<p>保育教諭の関わり</p>
<ul style="list-style-type: none"> かるたを拡大コピーし、朝の集いの時や絵本の読み聞かせの際に保育教諭が読み復唱する。 	<ul style="list-style-type: none"> 興味のある子は復唱しているが興味を示さない子もいる。 復唱する声が小さい。 「〇〇も上手だよ」と意欲的に参加する子が増えた。 皆のまゝで復唱した子は自信を持ち毎回元気な声で参加している。 絵札を見て読み札の一部が出てくる。 復唱がスムーズになっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 子ども達が分かりやすいように絵や読み札の説明をする。 ジェスチャーをつけて興味を持たせるようにする。 元気な声で復唱できる子どもを前に立たせみんなの前で復唱してもらう。

<ul style="list-style-type: none"> ・「あ行」を覚え始めているので次は「か行」の復唱を始める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・まだ興味のない子も見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・興味のない子どもも見られるので心を寄り添って興味を持つような声かけをする。
<p>梅組（3歳児） 実践方法</p>	<p>子どもの姿</p>	<p>保育教諭の関わり</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・朝夕の集いの際、五十音を発声しながら行事ごとかるたの読み合わせを行っている。 ・自由遊びの際、保育教諭の読み札を聞いてかるた遊びを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育教諭の後に発声し、読み札を復唱している。 ・絵柄の意味を知る。 ・絵札を見て競争して取り合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・かるた一語一文意味を知らせる。 ・かるたに興味を持てるよう、手の届く場所に設置する。 ・一緒に遊びに参加し楽しむ。
<p>百合組（4歳児） 実践方法</p>	<p>子どもの姿</p>	<p>保育教諭の関わり</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・子ども達が見やすいように連絡帳のスタンプ押しの所へ日替わりでかるたを掲示している。 ・朝の集いや午睡前に提示していたかるたを見せる。 ・グループに分かれてかるた遊びを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝のスタンプ押しの時に「今日はどれかな？」と声をかけながら見ている。 ・かるたの内容に興味を示している。 ・スタンプ押しをしながら確認したかるたを全体の表から探して「今日はこれだね」などと友だちと会話を楽しんでいる。 ・札を取れていない子がいると「〇〇さんがまだだよ」と友だち同士で声をかけたり、励まし合ったりしている。 ・取った枚数を数え前日より多いと「やった」と拍手でお互いに喜びをわかち合っている。 	<div data-bbox="1002 936 1375 1115" data-label="Image"> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・朝の集いや午睡前に今日のかるたを確認したり、その意味を知らせる。
<p>桃組（5歳児） 実践方法</p>	<p>子どもの姿</p>	<p>保育教諭の関わり</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・いつでも好きな時に手に取って遊べるようにセットしておく。 ・全員でかるたをする時間を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・興味のない子どもも興味のある子とペアを組んで応援しながら楽しんでいる。 ・ひらがなを読める子どもが自然と読み手になってしまい、「自分も取りたい」と訴える。 ・子ども達同士で相談し合い、読み手はその日の当番ペアで行う。 ・取れる子はどんどん取るがまだひらがなが読めない、又は探しだすことが難しい子は取り残されてしまう。 ・最後に取れた枚数を喜んで発表する側で、「1枚もない」と悲しそうにしている子を見て「かわいそう」「次頑張って！」という優しい励ましの声が聞かれた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・読めない子どもと読める子どもでペアとなり、読み手になってみるよう提案。 <div data-bbox="1002 1736 1375 2016" data-label="Image"> </div>

<ul style="list-style-type: none"> ・朝の会などで今日のかるたを1枚ずつ紹介する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合い ・1枚取ったらお休み。(みんなが1枚とるまで) ・みんなが1枚取れたら2枚目へ。 ・取れない子どもへ側からさり気なく指差しや耳うちで教える姿が見られた。 ・なかなか取れない子が取れた時には自然と拍手がおこっている微笑ましい状況が見られた。 ・覚える子が増えた。 ・お家で覚えた子どもがどんどん発表すると「すごい!」と刺激を受け「わたしもお家で家族と一緒にやろう」という声が聞かれた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「みんなが取れるには?」「みんなが楽しめるには?」「どうしたら良いかな?」と話し合うよう提案。
異年齢実践方法	子どもの姿	保育教諭の関わり
<ul style="list-style-type: none"> ・合同保育時間にいつでも遊べるように思いやりかるたを身近に置いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年長児が年中児を誘ってかるた遊びを教えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育教諭も一緒に参加して楽しんでいる。

6. 考察

- ・思いやりかるたを通して文字や思いやり行動へと関心が持てるようになった。
- ・友だちを気遣う姿(行動)も見られるようになった。
- ・年齢に合った取り組み方を工夫することで、遊びの方法は一つではないことが分かった。
- ・かるた遊びは対象年齢があると思っていたが園独自で作成したかるた遊びを取り入れることで0歳児から5歳児までの全園児が興味を示すようになった。また、絵札を見ながら会話が膨らんだ。
- ・子どもたち同士で「どうぞ」「ありがとう」のやりとりも多く見られるようになった。

7. まとめ

相手に感謝する言葉や保護者から褒められる体験が多くなり、子どもたちも自己肯定感が育まれてきたように感じられる。思いやり保育の実践は結果がすぐに見えるものではなく「これでいいのかな?」など葛藤することもあったが、実践して12年間の日々の積み重ねの中で培われてきたことを実感している。又、保護者と共に子育ての楽しさを共有し、一人ひとりの保護者に寄り添いながら子ども達の思いやりを引き出していけるように、常にプラス思考を意識して思いやりの輪が子ども達の周りで満ち溢れる社会になってくれることを願い、これからはしっかりと関わっていきたい。

改めて子ども達の思いやりの心を育むことが幼児教育から小学校教育の10の姿へと更には道徳教育へと結びつ

くことを信じて今後とも当法人の理念として取り組んでいく。

8. 今後の課題

- ・興味を示さない子への導入の仕方。
- ・かるたを作成したことにあたってかるた遊びの導入の仕方を今後、確立していく。
- ・ひらがなが読めない子への配慮。

かるたを「幼児期の道徳教育」の教材として、保護者と共に研究し、今後も教育活動としての領域を深めたいと考えている。

※「子育て思いやりかるた」紹介

- ・思いやりかるたは思いやりの大切さをかるた遊びで覚える玩具である

制作：玉重福祉会〈愛心こども園 第2愛心こども園 仲井真こども園〉

監修：塩川式思いやり研究所所長 塩川正人氏



*保護者アンケートの結果を通してご家庭での我が子の思いやり行動の様子を一部資料として紹介

○我が子のご家庭での思いやり行動の様子を見て、成長したと感じたことがありますか

- ・おもちゃを親が片付けていると自らおもちゃ箱に戻してくれる。
- ・けがをして絆創膏を貼っているパパを見て「痛い？」心配そうに見て声をかけてくれる。
- ・おでかけの時一人で先に行ったりせず、後ろをチラチラ見て待っている。
- ・お風呂の時にパパ、ママの背中を流してくれる。
- ・落ちているゴミを拾ってゴミ箱に入れる。
- ・靴をそろえて靴箱に入れる。
- ・開けっ放しの戸を閉めてくれる。
- ・お友だちが登園をして来る時に「一緒に行こう」と誘ってくれる。
- ・掃除や洗濯物をたたむなど家事をしていると手伝ってくれる。
- ・お母さんが先に寝ているとお布団をかけてくれる
- ・泣いている弟の頭をよしよしとなでてくれる。
- ・お母さんが咳をすると、優しく背中をさすってくれる。
- ・お風呂の時、洋服やタオルを準備して持って来てくれる。
- ・ご飯を食べているとき「ママが作ってくれたお食事おいしい！」と褒めてくれる。
- ・体調が悪く休んでいるママを見て「大丈夫？そばにいるからね」と言ってくれる。
- ・洗濯物をたたんでいると、たたみ終わっている物をダンスにしまってくれる。
- ・何かをやってもらおうとすぐに「ありがとう」とお礼を言ってくれる。
- ・「誰が好きなの？」とたずねると、「みんな、大好き！」と答える。
- ・ぬいぐるみにタオルをかけてくれたり、「何か他に自分にできることある？」と気にかけてくれる。
- ・妹が泣いているとあやしてくれる。
- ・園から帰宅すると率先して自分の分だけでなく、妹の片付けをしてきている。
- ・「いつもお仕事頑張ってくれてありがとう」「いつもおいしいご飯を作ってくれてありがとう」等、「ありがとう」の言葉をたくさん伝えてくれる。

- ・寝ている弟に布団をかけてくれた。
 - ・ママの体調が悪いと「大丈夫？」と心配をして声をかけてくれる。
 - ・赤ちゃんが泣いていると、「大丈夫だよ～」と声をかけ、抱っこしてくれる。
 - ・飼っているペットに対して優しく声をかけ、なでたりエサをあげたりしてくれる。
 - ・自分より小さい子や困っている人を助けてくれるようになっている。
 - ・電話が鳴ると「はい、どうぞ」と携帯を渡してくれる。
 - ・自分が持っている玩具を貸してあげている。
 - ・「お仕事頑張ってるね」と優しく声をかけてくれる。
 - ・「おはよう、おやすみ、いただきます、ごちそうさま」のあいさつが上手にできる。
 - ・弟や妹の着替えを手伝ってくれる。
 - ・散歩している時、すれ違った方に、自分からあいさつをする。
 - ・アルコール消毒をしてテーブルを拭いてくれる。
 - ・泣いている妹に哺乳瓶を「はいどうぞ」と渡してくれる。
 - ・食事の配膳をしていると「私にさせて」と言って、家族全員分の食器を準備してくれた。
 - ・妹が泣いていると「どうしたの？お腹すいていたの？」と問いかけ、お母さんに「お腹すいてるってよ」と伝えてくれる。
 - ・園から帰宅したら自分の汚れ物を出しながら、妹の分の汚れ物も洗濯カゴに入れてくれる。
 - ・雨が降ってくると、お仕事のパパを「パパ、大丈夫かなー？」と心配してくれる。
 - ・お母さんのお腹の赤ちゃんに歌を歌ったり、「寒いかな？」「眠っているのかな？」と気にかけてくれる。
 - ・弟が泣いていると「大丈夫だよ。ぼくがいるよ」と言ってあやしてくれる。
 - ・雨の日に仕事へ行くパパに「雨だから階段すべらないように気をつけてね。ゆっくり降りてね」と言ってくれる。
 - ・お弁当の日に「作ってくれてありがとう。また作ってね、おいしかったよ」と言ってくれる。
- *保護者の皆様からは、日々子ども達の思いやりある優しい言葉に、心が癒され幸せだという感想が多く寄せられている。

講評：「思いやりの心」を育む活動ことこそ「道德教育」に繋がることを発見した

評者：石川 昭義

思いやりの心を育むという園の目標を具現化した実践（思いやりかるた）の記録ですが、「思いやり保育は幼児期の道德教育に繋がる」と言うためには、道德教育が何であるかを明確にしないと繋がっているのか/繋がっていないのかを検証することはできません。「…発見した」のタイトルは飛躍しすぎの感否めません。まずは、園のめざす子どもの思いやり行動を具体的に示すことができるとういと思います。

「思いやりかるた」では、年齢に合った取り組み方が工夫されていました。5歳児では、文字を読んだり意味を理解したりすることの個人差に配慮した工夫がなされており、友達を気遣う姿が見られたことは大きな成果だと思います。ただ、低年齢児ではフラッシュカードのような使い方をしたり、復唱をしたりしている記述は気になりましたので、実際の使い方についてももう少し詳しい説明があるとよかったです。

全体を通して、思いやりかるたで遊ぶ期間や時期がわかるような記載があるとよかったです。また、前年で経験したことが次の年にどのように生かされていたかがわかる事例があると遊びの展開がよりわかりやすくなったと思われます。

評者：高木 早智子

12年にわたる「思いやりの心」を育む保育活動の集大成である「子育て思いやりかるた」はとても素敵な作品だと思います。そのかるたを使って、あそびの中から子どもたちの思いやりを育もうとねらいを持って取り組まれた点も評価に値します。個人的に気になった点は、3歳未満児に対する実践方法です。0歳児室に拡大コピーをしたかるた

を置く、1歳児クラスではかるたをフラッシュカードのように見せる、2歳児では保育教諭が読み上げ、子どもたちが復唱するとありました。この実践方法の教育・保育のねらいは「文字や言葉、表現等に興味を持つ」でしょうか。園の思いが詰まった「思いやりかるた」に親しむにしても、3歳未満児へのねらいの設定としては少々無理があるように私には感じられました。年上の園児が遊ぶ姿を眺める、その楽しそうな雰囲気を楽しむなかで、成長とともに興味を持つという流れでも良いのではないかと思います。ご一考いただければ幸いです。

評者：日吉 輝幸

まさに“継続は力なり”、奇しくも12年前にも愛心こども園の「思いやりの心を育む活動」について講評させていただき、改めて12年間の実績が保護者から高い評価を受けていることに繋がっているのだろうと、私自身も嬉しい気持ちになりました。今回のレポートは、愛心こども園オリジナルの「思いやりかるた」について、0歳から年齢ごとの取り組みが分かりやすく記されており好感がもてました。しかしながら、表題にある「道德教育」につながるという、事例の記述がレポート中に無く残念でした。そもそも、私は「思いやり」自体が道德の一部と考えています。園生活の中で「思いやり保育」に取り組む際、社会生活を送る上でのルールを守ったり、善悪の判断をしたりといった道德的要素を含んだ場面があると思われます。それらを、あえて言う「道德教育」へどう結び付けているかという記述をしていただきたいと思いました。

長きにわたって大切な取り組みを継続されていることに敬意を表すとともに、今後も更に進展していかれることを期待しています。

